

聖徒の道

1981年7月20日発行（毎月1回20日発行）第25巻第7号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可



聖徒の道

7 1981



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト

顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア
ローレン・C・ダン
レックス・D・ピネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー
F・エンツィオ・ブッシュ

国際機関誌

編集主幹：

ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：

デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：

ボニー・ソーンダース

デザイナー：

ロジャー・ギリング

制作：

ノーマン・ブライス

もくじ

栄えある約束	マリオン・G・ロムニー	1
イエス・キリストへの証を得る	ブルース・R・マッコンキー	4
主の足跡に導かれて	ポーン・J・フェザーストーン	16
タイの列車転覆事故	キャロル・オズボーン・コール	22
彼女は貧しさを捧げました	マーサ・P・ティサム	25
質疑応答	ティーン・ジャーマン	27
「そして真理はあなたがたに自由を得させるであろう」	ジェームズ・E・ファウスト	30
「一番いやな奴」を教会に連れてくる	ジョーン・ベル	34
聖典腕だめし	ジョン・A・トベトネス	36
公正な異邦人	ウィリアム・G・ハートリー	39
過ちを克服する	ローウェル・L・ベニオン	46
おもちゃばこ		54
まぼろしの犬	ローリー・W・ソントン	55
開拓者エリザベス	ウィリアム・ハーレイ	59
ローカル・ニュース		62

聖徒の道 7月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30

印刷所 株式会社 精興社

配送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19

定価 年間予約2,200円
海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0595JA Printed in Japan

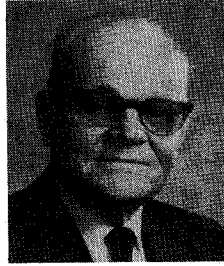
郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

栄えある約束

第2副管長

マリオン・G・ロムニー



主は、「汝らもしわれを愛すれば、われに仕えわがすべての誠命を守るべきなり」（教義と聖約42：29）と言っておられます。

予言者ジョセフ・スミスはこのように語っています。「まず戒めの何たるかを知らなければ戒めを守ることはできない。また、すでに受けている戒めに従わない限り、すべてを知ること、今知っている以上のことを知ることできない。」（*History of the Church*「教会歴史」5：135）

主は1830年に御自身の教会を組織され、その後すぐに教会の律法、すなわち主の教会の民を治める律法を定めた幾つかの啓示を授けられました。

私たちが、イエス・キリストの福音を聖

書だけに根拠を置いたものではないと理解するのは、もっともなことだと私は思っています。私たちは、聖書に教えられている福音の教義を神のみ言葉として受け入れています。不完全なところを除けばすべて神のみ言葉です。しかし、聖書に説かれている福音の教えは、主とその予言者たちが過去の神権時代に授けた教えの一部ではありません。

アダムの時代から予言者ジョセフ・スミスの時代に至るまで、各神権時代において主は、福音の原則を新たに啓示してこられました。その結果、過去の神権時代の記録は、原形がそこなわれていない限りにおいて福音の真理を立証しており、なおかつそ

れぞれの神権時代においては、過去の記録とは別に、新しい神権時代の民を導くに足る真理が啓示されてきました。

私は、いかなる方法にせよ、主が過去の神権時代に啓示された真理に関する記録を疑うことは望みません。私が今望むのは、予言者ジョセフ・スミスに啓示された福音が完全なものであり、天から直接この神権時代に授けられた言葉であるということ、私たちの心にしっかり刻みつけることです。私たちに永遠の生命にかかわる原則を教えるには、ジョセフ・スミスに示された福音だけで、十分だからです。福音は、現代の予言者たちを通してこの神権時代に啓示された真理であり、戒めなのです。

ここで、その中の幾つかについて考えてみましょう。

「汝心を尽し、勢力と思いと体力とを尽して主なる汝の神を愛すべし。」(教義と聖約59：5)

「汝らは主なる自分たちの神を拜して主の賜る地に幾久しく暮すよう汝らの父母を敬え。」(I ニーファイ17：55)

「汝己れの如く汝の隣りを愛せよ。」(教義と聖約59：6)

「汝怠惰なことなかれ。およそ怠惰なる者は働く者のパンを食することもなく、またその衣服も着るべからざればなり。」(教義と聖約42：42)

したがって私たちは、つましく勤勉でよ

く働く民になるように命じられているわけです。

主はまたこのようにも言っておられます。「さて見よ、われわが教会員に告ぐ。汝ら人を殺すなかれ。人を殺す者は、この世に於てもまた来世に於ても赦さるることなし。」(教義と聖約42：18)

この戒めに従うのが賢明なことは言うまでもありません。

別の所で主はそれに加えて、「何事にてもこれに類することを為すことなかれ」(教義と聖約59：6)と命じておられますが、この言葉から具体的にこそ示されていないものの、殺人と同じ性質の犯罪がほかにもあり、それは殺人と同様の罰を伴い得ることがわかります。

「汝ら盗むなかれ。盗みて悔い改むるころなき者は捨てらるべし。」(教義と聖約42：20)これは、盗みを働いて悔い改めようとしない者は教会から除外される、つまり教会員たる資格を剥奪されるという意味です。

統計によれば、「汝ら盗むなかれ」というこの戒めを破ることによって引き起こされる犯罪は、他のすべての犯罪を合わせた以上に高い発生率を示しています。

盗みには巧妙な手口がいろいろあります。しかし幸いなことに、正しい生活をし、識別の賜を受けている人は、正直か不正直かをはっきり見きわめることができます。

「汝ら為りを言うなかれ。偽りを言いで悔い改むるころなき者は捨てらるべし。」
(教義と聖約42：21)

「汝ら誠心を以て妻を愛して……」(教義と聖約42：22)

「汝ら姦淫することなかれ。姦淫をなして悔い改めざる者は捨てらるべし。」(教義と聖約42：24)

この戒めは十戒の中にもありますが(出エジプト20：14)、ここで再び与えられていることから、今日の教会員にも当然この戒めを守る義務があります。

「……姦淫をなして悔い改めざる者は捨てらるべし。」(教義と聖約42：24)

この戒めに背いた人は、殺人を犯した人に次ぐ罰を受けます。まず、姦淫の罪を犯すと主のみたまが失われるので、善悪を判断する力が弱くなってしまいます。また、うそをつくことや自尊心の喪失、不忠実も姦淫と密接な関係があります。しかし、もし私たちがあらゆる努力を払って人生の目的を果たすことに真面目に取り組んでいるとすれば、神の罰を逃れるために何であれ不道德なことは避けるに違いありません。

「汝ら隣人の悪口を言(う)……ことなかれ。」(教義と聖約42：27)

「汝ら貧しき者のことを思い起こ……せよ。」(教義と聖約42：30)

「汝相愛して共にこの世に生きよ。」(教義と聖約42：45)

「汝……貪(る)……ことなかれ。」(教義と聖約19：25)

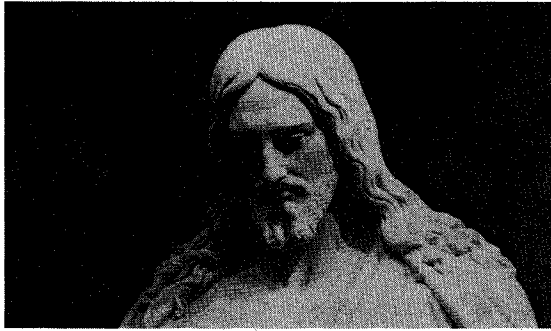
ほかにもまだたくさんありますが、望ましいことは、私たち皆が聖典を学んで、自己の責任に気づくことです。

そうした戒めの中には、主が十戒の中でイスラエルの民に与えられたのと同じものが幾つかあります。しかしながら、それらはこの神権時代において再び私たちに与えられたものであり、したがって私たちは言い訳をすることはできません。現在は効力を失っていると弁解することはできないのです。

そのようなことから、最後に、私は主の戒め——人生において成功を得るために主が定められた律法を字義の上でも、また精神においても厳密に守るようにと繰り返し申し上げます。そうするならば、この世における成功のみならず、平安、自己達成、喜び、永遠の幸福という無限の価値あるものをも得ることができるのです。

「もし汝わが誠命を守り終りまで忍ぶならば永遠の生命を得ん。これ神のあらゆる賜の中最大なるものなり。」(教義と聖約14：7)

これはまさしく栄えある約束ではないでしょうか。



イエス・キリストへの 証を得る

十二使徒評議員会会員
ブルース・R・マッコンキー

こ こ数年間、私は他に類を見ない偉大な御方であるイエス・キリストの生涯について知ろうと努力してきた。すなわち、この世にあった日々語られたみ言葉、なされたみ業、自らもたらされた贖い、この世にあってもお亡くなりになっても、また復活されてからも御自身と共にあった栄光など、人が知り得るすべてのことを知ろうと努めてきた。

私は畏敬の念にかられている。高さから

遣わされた栄光ある御方が人間の中に住まわれたからである。主は肉体を仮の宿とされ、ひとりの女性からお生まれになった。また自ら人に仕える者となり、福音を通じて死を滅ぼし、生命と不死不滅をもたらすために永遠の王座から身を落とされた。偉大なる神、永遠のエホバ、全能の主は人間として、マリヤの息子として、ダビデの子孫として、全人類の罪の重荷を担う僕、御父の完全な現われとして我々の中に来られ



たのである。

1935年、この神権時代に組織された十二使徒第一定員会（現在の十二使徒定員会）設立100周年にあたり、ヒーバー・J・グラント、J・ルーベン・クラーク・ジュニア、デビッド・O・マッケイからなる教会の大管長会は次のような声明を出している。「人は自らを救おうと思うなら、ふたつの偉大な真理を受け入れなければならない。ひとつはイエスがキリスト、メシヤ、独り子、神の御子であり、その贖いの血と復活によって墮落がもたらした肉体と霊の死から救われること、もうひとつは、神がこの末日に予言者ジョセフを通して全人類の救いのために地上に再び完全なる永遠の福音と共に聖なる神権を回復されたことである。これらの真理なくして、人は後の世の富を期待することはできない。」(*Improvement Era* 「インプルーブメント・エラ」1935年4月号, p.205) その後で大管長会は、これらふたつの声明が真実であることを証している。事実、それは私たちすべての証であり、教会全体の証である。

私たちには世の人々に伝えるべき栄光あるメッセージがある。それは救いのメッセージであり、喜びと希望、善きおとずれのメッセージである。それは霊にかかわるものである。ここで、霊にかかわるメッセージの真実性と神聖さをどのように確立することができるかという疑問が起きてくる。

皆さんは霊にかかわる真理をどのように証明するだろうか。イエス・キリストの復活をどう証明するだろうか。御父と御子がジョセフ・スミスにみ姿を現わされたこと、また天のみ使いが来て彼に教会を設立する

ための鍵と力と権能を授けたことをどのよう

に証明するだろうか。

私たちは古代の使徒たちが立たされたとまったく同じ状況の中にある。彼らにも世に伝えるべき声明があった。彼らはまず、主イエスが文字通り神の御子であり、この世に来られて限りない永遠の贖いの犠牲を捧げられたこと、またその犠牲を通してすべての人が不死不滅となり、信じて従う者は高められて永遠の生命を受けるということを宣言しなければならなかった。次に彼らは、自分たちすなわちペテロ、ヤコブ、ヨハネ、すべての十二使徒、七十人、その他の人々が、王国の鍵と福音の真理を宣言しその儀式を執り行なう権能を与えられた、神に召された合法的儀式執行者であったことを宣言しなければならなかった。では11人の使徒やそれに従った者すなわちラビとなる訓練も受けておらず、世の人々からは学者とも思われていなかった11人のガリラヤ人たちは、どのようにしてイエスの言われたすべての生ける者に救いのメッセージを伝えるという責任を果たすことができたのだろうか。

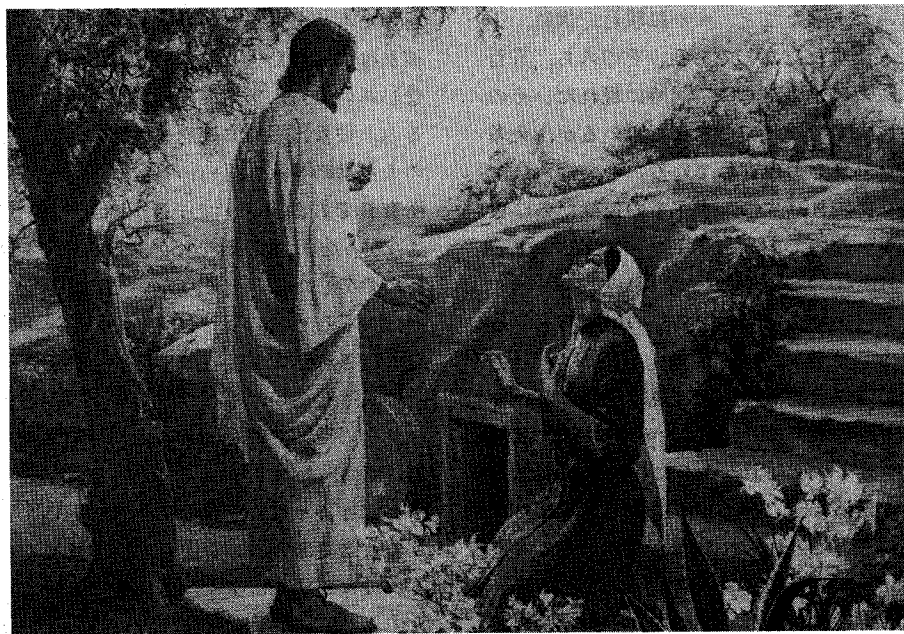
私はここでキリストの生涯の一部をとらえ、それをひとつの例、模範としてまた指示として使いたいと思う。それは救いのメッセージが当時どのように伝えられたか、その原則を示してくれる。もしここで述べられることが理解できるならば、私たちは今日、同様のメッセージを他の御父の子供たちに伝えるために何をしなければならぬかが大体わかるはずである。

私は、イエス・キリストに対する証は復活に対する信仰いかんによると信じている。

もしイエスが死からよみがえられたとしたら、イエスは確かに神の御子である。イエスが神の御子であるならば、イエスの福音は真実である。福音が真実であれば、人はそれを信じなければならない。信じなければその人の昇栄は無に帰する。また人々は、イエスの教える真理を受け入れてバプテスマを受け、律法を守らなければならない。さもなければのろわれるのである。このように考えてくると、もしも当時の使徒たちが、イエスが死からよみがえられたことを人々に確信させる権威と能力があったなら、主のみ業が真実であり、神から出たものであることを人々の間に確立することができたはずである。では復活をどのように証明することができるだろうか。これからそのことについて考えていくが、それは証によ

って証明できるのである。

パウロはイエス・キリストが「聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の子と定められた」（ローマ1：1—4 参照）と証している。復活はイエスが神の御子であったことを証明している。パウロはまたこのように述べている。「兄弟たちよ。わたしが以前あなたがたに伝えた福音、あなたがたが受けいれ、それによって立ってきたあの福音を、思い起してもらいたい。（これがまさしく福音の真髄であるが）もしあなたがたが、いたずらに信じないで、わたしの宣べ伝えたたとおりの言葉を固く守っておれば、この福音によって救われるのである。わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリスト





が、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえったこと、ケバに現れ、次に、十二人に現れたことである。そののち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。そののち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ……たのである。」(Iコリント15：1-7)

では主イエスの生涯のこの出来事をもっとよく見てみたいと思う。

二階の広間での晩餐と説教の後、ゲツセマネの園での計り知れない苦悩の後、裁判をされ十字架におかかりになった後のことから始めよう。イエスの遺体は金曜日の日没前に墓に入れられた。そしてイエスの霊は38時間から40時間霊界にいたのである。

日曜日の朝早く、イエスは死からよみが

えられた。時間ははっきりしていないが、聖典には「まだ暗いうちに」(ヨハネ20：1)とある。マグダラのマリヤが墓にやって来た。新約聖書に出て来る女性の中で、主の母マリヤを除けば、マグダラのマリヤは非常に際立った存在になっている。マグダラのマリヤはイエスや十二使徒と共にガリラヤの町や村へ伝道の旅をした唯一の人物として名前が出てくる。彼女が墓にやって来ると、主イエスの遺体はなくなっていた。彼女はみ使いからキリストがよみがえったこと、そして約束通り彼らよりも先にガリラヤに行かれることをペテロに告げるように言われた。

その後のことは定かではないが、おおよそのことはわかっている。彼女は戻って行ってペテロに話し、再び墓に戻って来たかあるいは墓から出て行こうとした時に、復活したもうた主に会った。いずれにしても彼女は復活した人を見た最初の人となった。悲しみにくれ、不安な思いに涙を流していると、彼女は人の気配を感じた。彼女はその人を闇の番人と思い、自分がその遺体の所有者であるというはっきりした気持ちでこう言った。「もしあなたが、あのかたを移したのであれば、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります。」(ヨハネ20：15参照) その人はただひとこと「マリヤよ」と答えた。その瞬間、彼女はその人が主であることに気づいたのである。それから彼女は「ラボニ」と言った。それは「ラビ」という言葉の敬語であり「わが主」という意味である。彼女がすぐに主イエスに身を寄せようとすると、主はこのように言われた。「わた

しにさわってはいけない。わたしは、まだ天におられる父のみもとに上っていないのだから。」(霊感訳ヨハネ20:17参照)

主が、マリヤとお会いになったすぐ後に昇天されたのか、それとも聖書に記されていない出来事が昇天前にあったのかは定かではないが、いずれにしても、主は確かに御父の所に昇って行かれた。それは、そのすぐ後で、記録が告げるところによれば「明け方に」(マタイ28:1)、他の女たちが連れ立って墓のところに行って来て天のみ使いから色々な指示を受け、しかも墓から出て来たところでイエスに出会い、イエスのみ足を抱いているからである。それはイエスの手や他の釘跡にも触れたことを意味するものである。私たちには、イエスがマグダラから来た女たちにみ使いが与えたと同じ指示を与えられたこと以外、そこで何が起こったかわからない。イエスはこう言われた。「行って兄弟たちに、ガリラヤに行け、そこでわたしに会えるであろう、と告げなさい。」(マタイ28:10参照) これがイースターの朝に、死からよみがえられた主が人人に現われたふたつの出来事である。

もうひとつは、ペテロへの現われである。これは詳細な記録もなく、時間的な前後関係も定かではない。主がペテロに現われたもうたのは、彼が教会の大管長となるはずであり、王国の鍵を持っていたからであろう。主が、御自身とペテロとの間の関係とペテロの持っていた権威と権能とを再確認するためにペテロにみ姿を現わされたのは明らかである。つまり、託した事柄をなすよう再度命じるためであった。

主が次にみ姿を現わされたのは、エマオと

という村へ行く途中の道であった。これに関しては詳細に知らされている。エマオという場所はわかっていないがエルサレムから11キロないし13キロ程離れた所である。その日の午後、ふたりの弟子がエルサレムからエマオへ向かって歩いていた。そのうちのひとりクレオパと言った。もうひとりの弟子はおそらくルカであったろう。彼だけがここで起こった出来事を記しているからである。ふたりが歩いていると見知らぬ人が近づいて来て、ふたりに何を語り何を考えているのかと尋ねた。ふたりは見知らぬ人に神聖な語らいを妨げられたことで多少迷惑な気持ちを感じてこう言った。「あなたはこのあたりの人ではないのですか。エルサレムで何が起こったのかご存知ないのですか。過越の日にイエスが十字架にかけられ、三日目に甦ると約束されたのを聞いていないのですか。」(ルカ24:18-21参照) それからふたりは、仲間の女の人たちから聞いた主の復活の話をした。

するとイエスは彼らに言われた。「ああ、愚かで心のにぶいたため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。」

(ルカ24:25) こう言って主は、モーセやすべての予言者、詩篇を引き合いに出し、御自身のメシヤとしての使命について記されていることを説かれた。このような会話が2時間は続いたと思われる。とにかく彼らは、その晩泊まろうとしていた場所に着いた。ふたりはイエスと一緒に泊まるように勧めてこう言った。「わたしたちと一緒に泊まり下さい。もう夕暮になっており、日もはや傾いています。」(ルカ24:29参照) イエスはなお先へ進み行かれる様子であっ

たが、ふたりの勧めに従われた。それからイエスはパンをとり、さいて祝福された。イエスはそれをふたりのよく知っていた方法でなされたに違いない。あるいはまたふたりの目の覆いを取り除くような出来事が他に起きたのかもしれない。ふたりはたちまちその方がイエスであるとわかったのである。それからイエスはふたりの前からみ姿を消された。

これが4度目の現われである。このふたりの弟子たちはすぐにエマオからエルサレムに戻って行った。そして二階の広間と呼ばれる所に入って行った。ここは最後の晩餐が行なわれたのと同じ部屋であると思われる。その確実性は非常に高い。そこは広いゆったりとした所で、大勢の人が集まっていた。普通私たちの話に出てくるのは十人の使徒たちのことだが、そこには他の人々もいたのである。女性もいたと思われる。とにかく、ふたりの弟子は行って自分たちに起こったことを話した。ふたりが部屋に入って行くと、だれかが主がシモンに現われたことを証していた。このことから、ペテロへの現われが遅くともこの二階の広間の出来事よりも前であることがわかる。

彼らが食事をしたり証をしたりしていると、記録には彼らの中にイエスが立たれたと書かれている。そしてこのように続いている。「彼らは恐れ驚いて、霊を見ているのだと思った。」(ルカ24:37)彼らがそのように思ったのも無理はない。なぜなら、戸を閉め鍵をかけた部屋に、天井か壁を抜けて不意にだれかが現われたからである。イエスは彼らに言われた。「なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。わ

たしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ。」(ルカ24:38—39)

確かに彼らはイエスの手足の釘跡に触れ、脇腹の槍で刺された傷に手をさし伸べたのである。私たちははっきりした記録から、これはその年の後半にイエスがアメリカ大陸に現われた時にニューファイの民がしたこととまったく同じであることを知ることができる。それからイエスは二階の広間にいる人々に向かってこのように言われた。「ここに何か食物があるか。」(ルカ24:41)これは修辭疑問文である。なぜなら彼らは食事の途中でありイエスもそれをご存知だったからである。彼らが「焼いた魚の一きれをさしあげると、イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた。」(ルカ24:42—43)それからまた会話が続けられた。

十二使徒のうち十人がそこにいた。理由はわからないが、トマスは一緒にいなかった。彼らが自分たちの前で起こったことをトマスに話すと、彼はこう言った。「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れてみなければ、決して信じない。」(ヨハネ20:25参照)このような疑いが生じたのは彼自身に問題があったためと思われる。事実そうであった。しかしそれは他の十人の使徒がイエスを霊だと思った時に抱いた疑問と同様にそれほど重大なものではなかった。トマスは使徒たちの証を受け入れられたはずだが、彼は復活というものが実際にどのようなもので肉体的にどうなるのかということはまだ理解していなかったのである。実際トマスという



人は十二使徒の中でも最も勇敢な使徒のひとりであった。イエスがラザロを死からよみがえらせるためにベタニアに行こうとされた時、また他の者たちがその地域のユダヤ人が主を殺そうとしていると言った時に、「わたしも行って主と共に死ぬ」と言ったのは十二使徒の中で彼ひとりであった。(ヨハネ11：16参照)

彼らは皆勇敢で能力があり献身的な人々である。しかしそうした資質は一朝一夕に得たものではなく、一步一步達成していったものなのである。

それから1週間後の安息日、明らかに二階の広間と思われる所に、同じ人々もしくは前回集まった人々を主体とした人々が集まった。これは安息日としての日曜日の礼拝方法を示している。そこでイエスがみ姿を現わしたまい、トマスにこのように言われた。「あなたの手を伸ばして私の手足の釘あとをさわってみなさい。信じない者にな

らないで、信じる者になりなさい。」(ヨハネ20：27参照)するとトマスは明らかにひざまずいてと思われるがこう答えたのである。「わが主よ、わが神よ。」(ヨハネ20：28)彼は主の勧めに従って、前の週に他の人々がしたと同じように釘跡や傷に触れたに違いない。するとイエスから「あなたは見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」という言葉が返ってきた。(ヨハネ20：29参照)

年代順に言って次に現われたのは、記録にもあるように、テベリヤの海辺(ガリラヤの海)である。何時間かたったに違いない。夜明け頃のことである。そこには十二使徒のうち7人しかいなかった。そのうちの5人の名前が明らかにされている。彼らは一晩中漁をし何の獲物もなかった。イエスは岸に立っておられ、彼らに声をかけて言われた。「子たちよ、何か食べるものがあるか。」彼らには何もなかった。するとイエスはこう言われた。「舟の右の方に網をおろして見なさい。」(ヨハネ21：5-6参照)彼らはそのようにした。するとたちまち網は魚でいっぱいになり破れる程であった。これはイエスがこの世にあった時、ゼベダイの息子たちに起こされた奇跡を思い起こさせる。

他の使徒たちよりも霊的洞察力の強いヨハネは「あれは主だ」と言った。(ヨハネ21：7)激しい性格の持ち主のペテロは漁師の服を脱ぎ捨てて岸まで泳いで行き、最初に主にあいさつをした。彼らが漁を引き上げ岸に戻ると、イエスは火を起こして魚とパンを焼いておられた。それからイエスは彼らのとってきた魚を少しもらい、それを



焼いて先に焼いておいたものに加えられた。彼らはそれを食べた。理由は後で述べるが、イエス御自身もその場で一緒に食事をされたと思われる。

イエスがベテロに、「私を愛するか」と3度尋ね、「わたしの小羊を養いなさい」という偉大な戒めを与えられたのはこの時である。またイエスがヨハネに御自分が栄光のうちに戻って来るのを見るまで生きて人々と国々に証を述べるだろうと言われたのもこの時である。

次に現われたのはガリラヤの山であった。これについてはほとんど知らされていないが、500人以上もの人々がその場に居合わせたことから考えても、栄光ある偉大な素晴らしい現われであったことがよくわかる。そこには女性もいたに違いない。イエスは

そこでニーファイ人の中でなされたと同じような方法で、選ばれた人々にかつてないほど多くの教義を語り、多くの事をなされたと思われる。とにかく、イエスが十二使徒に、全世界に出て行ってすべての造られたものに福音を宣べ伝えるようにという戒めを与えられたのはこの時である。他にも多くのことを語られた。

これが8度目の現われである。この後、イエスはヤコブに姿を現わされた。(Iコリント15:7参照)

新約聖書に出ている10度目の現われは、昇天された時である。これに関しては、イエスが復活された40日後に11人の使徒に姿を現わされたこと以外わかっていない。彼らはオリブの山に登って行き、その山の上でイスラエルのために国を復興することについ

て話し合っていた。するとイエスが昇天されたのである。記録によると、ふたりのみ使いがそばに立ってこう言っている。「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう。」(使徒1:11)

以上のことを簡単にふり返ってみると、いくつか大切な事柄がわかる。復活した人は自らの内に栄光を留めながら地上の人間と同様に歩くことができる；かつてこの世に肉体を持って生きていた時にしていたと同じ様に人と話し、道理を説き、教えることができる；神の御子であることを現わすことも隠すこともできる；有体のまま堅い壁などを通り抜けることができる；触れることのできる骨肉の体である；必要ならば(特別な場合に)肉体の傷などを保ち続けることができる；食物を食べ消化することができる；私たちにわからない方法で人間の目から姿を消したり場所を移動したりすることができる。以上のような事柄がわかるのである。

では、御父と御子がジョセフ・スミスにみ姿を現わされたことをどのように証明することができるだろうか。イエスが使徒たちにお与えになった救いのメッセージはどうだろうか。ここにひとつの例がある。この言葉は、ペテロがコルネリオの家に行った時に語った説教の一部である。コルネリオはみ使いの訪れを受けて、自分が主におぼえられていることを理解していた。ペテロはこのように言っている。「わたしたちは、イエスがこうしてユダヤ人の地やエルサレ

ムでなされたすべてのことの証人でありませぬ。人々はこのイエスを木にかけて殺したのです。しかし神はイエスを三日目によみがえらせ、全部の人々にではなかったが、わたしたち証人としてあらかじめ選ばれた者たちに現われるようにして下さいました。わたしたちは、イエスが死人の中から復活された後、共に飲食しました。それから、イエスご自身が生者と死者との審判者として神に定められたかたであることを、人々に宣べ伝え、またあかしするようにと、神はわたしたちにお命じになったのです。預言者たちもみな、イエスを信じる者はことごとく、その名によって罪のゆるしが受けられると、あかしをしています。」(使徒10:39-43)

このようにペテロや古代の人々は、イエスが神の御子でありイエスの教えられた福音が救いの計画であることを、イエスが死からよみがえられたことを確信することによって証明している。私たちの場合はどうであろうか。私たちが人が死からよみがえれることを証明するには、それが自分にとっても起こり得る真実なものであることをみたまの力によって証することである。なぜなら復活は霊に関わることだからである。ペテロは群衆の中に入っていってこのように言うことができたはずである。「私はイエスが主であることを知っています。なぜならイザヤがイエスについてこのことを何度も語っており、他の予言者たちの中にもこのことを語っている人がいるからです。」私は彼が実際にそうしたと思っている。しかしペテロがなし得た最大のことは、人々の前に立って次のように言うことであった。

「私はイエスが神の御子であったことを知っています。私はあの二階の広間において、実際にそうであるとわかりました。イエスは私たちの間で3年以上の間教えや導きを施された方です。私はそのみ手とみ足の釘跡に触れました。また脇腹の槍で刺された傷跡にも手をさし入れてみました。私はイエスが魚やパンを食べられるのを見ました。イエスは体を持っておられます。御自身が骨肉の体であると言われました。私はイエスが神の御子であることを知っています。私はイエスの証人です。」この救いのメッセージは証人たちによる宣言であり、主イエスの生涯のこの出来事は私たちに、回復のメッセージを御父の他の子供たちに伝える時にさかねばならない事柄を教えている。

では回復のメッセージが真実であることをどのように証明できるだろうか。まず福音を説くこと、救いの教義を教えることである。そうしなければ人々はあなた方の証の価値と真実性を計ることもできなければ考慮してみることもできないであろう。まず第一に、私たちの時代に神が驚くべき栄光の中でなされたことを教えるのである。天が開かれ天からの声が再び私たちに下された様子を、そして人に鍵と力と権能とを授けるために天のみ使いが送られて、主御自身の完全な永遠の福音が回復されたいきさつを教えるのである。こうして聖典を用いて真理を教え、メッセージをできるだけ明瞭かつ簡潔にした上で、最後に残された最も素晴らしい説得力のあるもの、そして人々に確信を与えるものは、皆さんの証である。

教会員としてまた地上における神の王国

の会員として、私たちはいわゆる聖霊の賜を受けている。聖霊の賜は、私たちが忠実であることによって神会の中のその御一方を常に身近に感じることでの特権である。すなわちそれは、定められている永遠の律法と調和した霊の御方である神の聖きみたまが、私たちの内にある霊に語りかけ、永遠に証明をしてくれることを意味している。私たちはそのような証明を証と呼んでいる。それは啓示によると、神の聖きみたまから来るものである。

今日私たちの証は次の3つから成っている。(1) イエスが主であり、世の罪のため十字架におかかりになった生ける神の御子である、(2) ジョセフ・スミスは、福音の真理を回復し私たちの時代にキリストに関する知識を明らかにする人として召された神の予言者であった、(3) 末日聖徒イエス・キリスト教会が地上で唯一の真実の生ける教会であり、救いのあるただひとつの場所、人の子らに福音を説き、救いをもたらす組織であるというこの3つである。

私たちは福音を教えなければならない。そして力を尽くして簡潔に教えた後、証を述べるのである。「私にはそれがはっきりわかっている」と言うのである。神の聖きみたまが自分自身に、私たちに、そして末日聖徒に、このみ業が真実であることを明らかにしてくれたと話すのである。私たちが福音を教え証を述べたなら、霊の波長を同じくするすべての人、真理を受け入れるための霊的な準備ができていないすべての人は、心の中で私たちの語ったことが真実であると感ずるはずである。それは論議し合う問題でもなければ、知識的な改宗というもの

私たちがイエスの生涯から何かを得てそれを生活の中に取り入れようとしなければ、当然受けられるはずの恵みを受けることができない。私たちはイエスの生涯を知り、それにならった生活をしなければならぬ。またイエスの生涯の中のエピソードを知り、そこから今日の生活に応用できる概念や原則を学ばなければならぬ。

でもない。それは神の聖きみたまが明らかにしてくれるものなのである。

どの時代、どの神権時代にもこれと同じ方法がとられてきたと思う。私はまた他のどの時代にあったものにも勝るものが今の時代に与えられていると思う。主は私たちに真理の証し人としてモルモン経を与えて下さった。そのモルモン経は「ユダヤ人と異邦人ともにイエスは永遠の神なるキリストにましまして、万国の民に現われたもうことを確信させるため」（モルモン経とびらの頁）にあるのである。またモルモン経は「聖典の真実なることと、神は人々に真に靈感を与えて古えの代と同じくまた今の代にも……人々を召すことを世に証す」（教義と聖約20：11）るために世に出されたのである。

私たちがイエスの生涯から何かを得てそれを生活の中に取り入れようとしなければ、当然受けられるはずの恵みを受けることができない。私たちはイエスの生涯を知り、

それにならった生活をしなければならぬ。またイエスの生涯の中のエピソードを知り、そこから今日の生活に応用できる概念や原則を学ばなければならぬ。

主御自身がモルモン経の真実性を証された時、主はこれまでに知られた中で最も荘厳な言葉を使われた。主は誓いを立てられたのである。主はジョセフ・スミスに関してこのように言っておられる。「彼はその書を、正にわが命じたる部分を翻訳したり、而してこの事は汝の主、汝の神生きたもうが如く真実なり、と。」（教義と聖約17：6）

霊の波長が正しく合っていて、しかも自らが語る永遠の真理を理解しているならば、私たちは、今の時代に永遠の真理が回復された事について同じような証をすることができるはずである。私たちは「主は人々の間に御自分の王国を回復された」と言うことができるのである。神がましますこと、これが私たちの証でありまたそれは真実である。

主の足跡に導かれて

七十人第一定員会会員
ボーン・J・フェザーストーン



私の頭に思い浮かぶひとりの女性の話がある。彼女は非常に読書欲の旺盛な人で、その書齋には本があふれていた。彼女は毎晩帰宅すると、その中から本を取り出して読むのを常としていた。そして、読み始めた本は必ず最後まで目を通すのである。

ある夜、彼女はそれまでずっと意識的に遠ざけていた1冊の本を読んでみようと思った。その本を取り出して読み始めてみた。何とも退屈で面白味のない本であっ

たが、それを読み終えるまで他の本は絶対に開かないと心に誓っていた。そして毎夜毎夜読み続け、ついに最後のページを読み終えたのである。その本を書棚に戻して、彼女は心の中でつぶやいた。「こんな面白くない本であるのかしら」と。

後日、彼女はある男友達と外で会った。その友達は1冊の本の名前を挙げて、それを読んだことがあるかと彼女に尋ねた。それはあの退屈な本であった。その本のこと

を思い起こしながら、今度は自分の方から聞き返した。「ええ、読んだことあるわよ。でもどうして。」

「実は、僕が書いた本なんだ。」それが彼の返事だった。それからふたりはその本のことについて話し合った。

その夜、友人と別れた彼女は、家に帰ると書齋に入り、例の本を引っ張り出し、夜を徹して読んだのであった。太陽の光が東の空からさし始めた時、彼女はその本を閉じ元の所に戻して、心の中で言った。「こんな面白い本であるのかしら」と。その本を書いたのがだれかを知って、こうも変わったのである。

教義と聖約の中で主はこう言っておられる。

「御父と人との仲保者にして、また御父の前にとりなしをする者の言に耳を傾けよ。

曰く『父よ、汝の悦びたまいし罪を犯さざりし者の蒙る^{こぼ}苦しみと死とを見そなわせたまえ。汝の子の流せる血、すなわち汝の崇められんがために与えたまいし、汝の子の血を見そなわせたまえ。

この故に父よ。わが名を信ずるわが兄弟らを赦したまえ。かくて彼らをしてわれに來りて永遠の生命を得しめたまえ』と。」

(教義と聖約45：3—5)

私たちも自分たちの著者、すなわち創造主について知るよう努めなければならない。確かに、あまりにも多くのことが、私たちがそうするか否かという点に常にかかっているのである。

私は、自分がこれまでの限られた教育の中で最も力を入れて学んできたのは、イエス・キリストについてであると思っている。

私は知識を増し加え、救い主についてさらに多くのものを読み、何にも増して主の大義に仕えてきた。救い主について人と語る時、私は胸の高鳴るのを覚える。

時には原点に戻って、救い主の生涯に思いをはせることも必要ではないだろうか。アルマはこう記している。

「神の御子は私たちの先祖の地であるエルサレムのあたりでマリヤから生れたもう。マリヤは神の力に覆われ、聖霊の力によって懐妊し、男の子すなわち神の御子である方を生むはずの処女であって、選ばれた貴い器である。

この男の子は世の中へ出て苦難とあらゆる誘惑である試みとを受けたもう。これは、この方が自分でその民の苦しみと病いとを引き受けると言いたもう言葉が成就するためである。

この御方はその民を縛る死の繩目を解くために甘んじて死を受けたまい、また肉体を持つ者として慈悲の心に富みたまい、虚弱の度に応じてその民を救う方法を知るために民と同じく虚弱を受けたもう。

『みたま』はすべてのことを知りたもうが、それでも神の御子はその民の罪を負い、自分が贖う力によって民のとがあやまちを取り消すために肉体に苦痛を受けたもう。これは私がかから証をすることである。」

(アルマ7：10—13)

私たちの日々の生活の中で、救い主が私たちのために実際にどのようなことをして下さっているかを知るには、救い主御自身の生涯というものをよく調べてみる必要がある。つまり、主の足跡を追って歩みを進めていくことにより、私たちは、夢想だに

しなかった所へと導かれるのである。それはどのような所か、ほんの少しではあるが幾つか一緒に訪ねてみよう。

よく知られているものに、さいせん箱に金を入れたやもめの話がある。私が思うに、彼女はその時、額があまりにも少ないことで、ひどく気遅れしていたのではないだろうか。私の知っているひとりの未亡人がいる。彼女は監督のもとに什分の一の年末面接を受けに来て、こう言った。「そうです。55ドル。それが私が納めた什分の一のすべてです。」つまり、彼女の年収は、わずか550ドルなのだ。彼女の話し振りはていねいで謙遜なものであった。「監督さん、それしかありませんが、確かにそれで全部です。」什分の一を除いた残りはわずか495ドルである。それは標準よりもはるかに少ない収入である。私たちは本当に救い主の教えを理解しているのだろうか。物質的には恵まれていても、心や霊の面で貧しい人がいる。かと思えばこの姉妹のように、貧しくても霊的に豊かなものを持っている人もいるのである。

救い主のことを思う時、心に浮かんでくるもうひとりの女性がいる。長血を患って、12年という歳月を苦しみ続けていた女性である。多くの医者にかかったが、財産を全部使い果たしただけで、病気は悪くなる一方だった。そして彼女は、イエスが町においでになるということを聞くと、わらにもすがりたい気持ちで、イエスを待ち受けていた。私が思うに、彼女は「あのお方の衣に触りさえすれば、この病気はきっと癒される」と心の中に念じながら、せきたてられるような思いで群衆の中に分け入ったの

であろう。そして彼女はついに手を伸ばして、主の衣に触れ、癒されたのである。

救い主は歩みを止めて、「わたしの着物にさわったのはだれか」と言われた。そこで弟子たちが言った。「ごらんとおり、群衆があなたに押し迫っていますのに、だれがさわったかと、おっしゃるのですか。」イエスは振り向いて、群らがる人々を御覧になった。そしてそこに、それとはっきりわかる女性を認められたのである。私の推測に間違いなければ、彼女は罪の意識を感じ、「返事をしなければ」と思った。それで彼女は主の前に進み出てひざまずき、ありのままに告白した。「主よ、私です」と。主はそれに対してこう言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。」(マルコ5:24-34参照) 私はこの話を思い出す度に、主を愛さずにはいられなくなる。

ほかにも、主の後をたどって行って、目にする事柄、行き着く所がある。そして、そこでも私は主への愛を覚えるのである。ある時、私のところへアイダホから電話があった。電話の主は若い夫婦で、ふたりには誕生して間もない、しかも早産の双子がいた。ひとりは一順調な育ち具合だったが、もうひとりには600グラムにも満たない体重で、ユタ大学の医療センターで治療を受けていた。モルモン経1冊の重さを考えてみていただきたい。それがその小さな魂の重さなのである。「手当てを受けてはいるのですが、病院に行って祝福を施していただければと思って電話を差し上げました」とふたりは私に頼んできた。その日は特別な日で、自由になる時間は朝の5時頃しかなかった。私は医療センターに駆け付けた。そし

てその部屋に入ると保育器があった。私はその小さな子供の頭に手を按こうとしたが、指だけで額が隠れてしまうのである。祝福の言葉を述べながら、私は、この子はいつか立派な体に成長し、若くして主の使いになるであろうという靈感を与えられた。

ほかにも、こういう経験がある。それはある大会を終えて、私がそこを立ち去ろうとしていた時のことである。感じの良さそうなある家族が私のところへ来て話した。彼らにはひとりの非常に難しい状況にある、教会員でない知人がいた。そして彼らはその人に祝福をしてあげることができないだろうかと考えていたのである。私たちはその人のいるアパートへ行った。居間にある家具と言えば、いすとステレオのふたつだけで、ほかには何もなかった。9歳になる少女がいて、父親を看病していた。父親の病気は癌であった。母親はというと、そのことを聞かされると、夫とその女の子と、そしてもうひとり年下の男の子を捨てて、家を出てしまったのである。玄関を通して案内された部屋には、2段ベッドが置いてあり、その父親はやせ衰えた体を下の段に横たえていた。私たちは癒しの儀式を行なったが、彼が生き長らえるという思いは湧いてこなかった。しかし私たちは彼にとって最も大切なこと、すなわち、ふたりの子供たちは守られ、天使と共にこの人生を歩み、彼自身が側にいられなくなっても心配することはないという祝福を施すようにと、靈感を受けたのである。この世の富のすべてを尽くしても、このような経験を買うことはできない。

主の足跡をたどって行って、私は最近、

ひとりの男の子とその父親に出会った。その男の子が友達と一緒に、ワイオミング州のコディーに近い、とある山すその小高い丘に登った時のことである。一本のたれ下がった高圧線があった。友人はうまくそれを跳び越えたのだが、その子は電線に足をとられ、感電死してしまった。友人は長い道のりを取って返し、父親にそのことを伝えた。年齢的には決して若くはなかったが、その父親は走りに走って、15分あまりで事故の現場に着いた。彼は電線に覆いかぶさっている息子に近づくと、板や大きな木の枝を使って、何とかその体を電線から離し、抱きかかえてこう言った。「イエス・キリストのみ名と聖なるメルケゼデク神権の権威と権能により我は汝に命ずる。汝生きよと。」少年は父親の腕の中で死の眠りから覚めた。そしてユタ大学医療センターに運ばれ、無事快復したのである。

主は私たちに、こうした目を見張るような体験をさせて下さるだけではない。私たちの生活をも変えて下さるのである。私が思い起こすもうひとつの話、それは、ネブカデネザル王の像を拝むことを拒んで、王自らの前に引き出された3人のヘブル人の役人、シャデラク、メシャク、アベデネゴの物語である。王は憤って3人に言った。「シャデラク、メシャク、アベデネゴ……わたしが立てた像を、ただちに拝むならば、それでよろしい。しかし、拝むことをしないならば、ただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。」(ダニエル3:15)

この年若い3人のヘブル人が味わった苦しみがどれほどのものか、あなたは理解できるだろうか。ただの苦惱、誘惑ではない。

彼らの生命はまさに風前の灯ともしびだったのである。

彼らの答えはこうであった。「ネブカデネザルよ、……わたしたちの仕えている神は、その火の燃える炉から、わたしたちを救い出すことができます。」そしてこう続けている。「たといそうでなくても、王よ、ご承知下さい。わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた金の像を拝みません。」(ダニエル 3 : 16—18)

私たちの人生に影響を及ぼしておられる御方が、3人の若人にそのような力を与えられたのだと、私は信じている。その御方は私たちがしっかりとつかむことのできる、堅固な何ものかを備えておられるに違いない。次のペテロの言葉はよく引用されるものである。「あなたこそ、生ける神の子キリストです。」(マタイ 16 : 16) そしてトマスはこう言っている。「わたしたちも行って、先生と一緒に死のうではないか。」(ヨハネ 11 : 36) 私はこれらの事柄に敬服している。

予言者ジョセフ、ハイラム、ウィラード・リチャーズ、ジョン・テイラーなどが生命の危険にさらされた時のことも思い出す。ウィラード・リチャーズは予言者ジョセフにこう言った。「ジョセフ、あなたに死刑が宣告されるようなら、私が代わりに死にます。」

その時、ほとんどの人はまだ知らなかったが、ジョセフは何かを悟っていて、こう言った。「しかし、ウィラード、それはできないことなんだ。」

ウィラード・リチャーズのそれへの答えはこう記されている。「いいや、ジョセフ、それでも私はそうするつもりだ。」(History

of the Church 「教会歴史」 6 : 616)

これらの事柄は、主の軍勢に数えられた人がどういう人かということ私たちに教えてくれる。また彼らの物語は、もし私たちにその気持ちがあるなら、神が私たちをどう変えられるかを知るための助けともなる。

イエスこそは私たちの創り主である。

救い主が厳格な教えを述べられた時、弟子たちは、ひとりまたひとりと去るようになり、二度と行動を共にすることはなかった。そして、最後に残ったのは使徒だけであった。救い主が彼らに向かって次のように言われた時、その胸は悲しみに満ちていたのではないだろうか。「あなたがたも去ろうとするのか。」ペテロが答えた。「主よわたしたちは、だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。わたしたちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています。」(ヨハネ 6 : 67—69)

皆さんはそのことについて考えたことがあるだろうか。主でなくて、だれのところに行ったらよいのだろうか。この世の中でどこに行ったらよいのだろうか。だれを信頼すればよいのだろうか。人知では測り知ることのできない平安は、どこに行けば見いだすことができるのだろうか。高く厚く立ちだかる山のような壁にぶつかった時、その向こう側へ抜けるには、どこへ行ったらよいのだろうか。主のほかに行くところがあるのだろうか。

さて私たちは、主と共に歩み続けることによって、どのような影響を受けるかというのを考える必要がある。主と共に歩も

うと望むなら、私たちはキリストの教えに従って生活しなければならない。ハロルド・B・リー大管長は次のように語っている。「何年前のある夜のことで、私はベッドの上で目を覚ましました。その時、私は自分が召された高い召しにふさわしくするには、この地上のすべての人を愛し、赦さなければならないということをはっきりと理解しました。そしてその時、私は安らぎ、導き、慰め、靈感を受け、その何たるかを理解しました。それらのものは、私に来るべき事柄を教え、私が知らされたことは神からのものであるということを中心に刻んでくれたのです。」(Improvement Era 「インブループメント・エラ」1946年11月号、p.760)

私は、リー大管長は自分がこの教会の予言者、聖見者、啓示を受くる者になるだろうということは知らなかったのではないかと思う。そして私もまた彼のように、私たちはこの地上に生を受けたすべての人を愛し、赦さなければならないと思う。放蕩息子であれ、連れ合いであれ、また離婚した相手や私たちに辛く当たる人であれ、あらゆる人を愛し、赦さなければならない。キリストのような人格を具えるには、この地上のすべての人を愛し、赦さなければならないのである。平安は、そうすることによって与えられる。

私たちがキリストと、キリストが十字架におかかりになったことを受け入れる時に求められる犠牲は、いつの場合も一人一人まったく同じであるとタルメージ長老は言っている。その犠牲は永遠にいつまでも変わることがない。それは結局、私たちに課せられているありとあらゆる犠牲なのであ

る。もし、キリストの真の弟子になろうとするのであれば、それ以下の犠牲であってはならないのである。ある人はこう言うかも知れない。「もっと頑張ろうとは思う。しかし、この辺が僕の限界だろう。」このような態度でいて、真の弟子になれるとはとても思えない。

現代の予言者の言葉に耳を傾けてみよう。キンボール大管長はこう言っている。「水潤う庭、心地よい木陰へ、また不変の真理のもとへと心から招きたいと思う。

私たちと共に、確信と安寧と一致を得ていただきたい。ここには冷たい水が湧き出ており、その泉は涸れることがない。

来て予言者の声に耳を傾け、神のみ言葉を聞いていただきたい。」(「大会報告1970—72」p.169)

そうです。今まで話してきたことの核心はここにあるのです。私たちは、主を見いだし、主が私たちの頭であられるということを知る状態にまで到達する必要があります。私たちが主を受け入れ、高慢な心を脱ぎ捨てて人々に仕えるならば、その時、私たちは主の足跡をたどって歩いていくのです。

「何を念うとも、念々われを見るべし。疑うなかれ、おそるるなかれ。

わが肋の突き傷と、またわが手足にある釘痕を見よ。忠信なれ。わが誠命を守れ。さらば、われ汝らに天の王国をつがしむるなり。アーメン。」(教義と聖約6:36—37)



タイの列車転覆事故

キャロル・オズボーン・コール



ユーファ・サブシムソンは目の前の光景を見て立ちすくみました。嫌悪感と恐怖に襲われ、かかわりあいになりたくない、手伝いもいやだ、引き返したいと思いました。眼前に列車転覆の惨状が広がっています。パン・ボンからの旅客列車とタイ南部行きの貨物列車が駅の近くで衝突し、客車が脱線したのです。死者が大勢出て、重傷者の数はおびただしく、まだ転覆した車輛の下敷きになっている人がいました。

ユーファはタイ婦人奉仕団に加入していて召集され、奉仕団の青い制服を着るなり現場へ駆けつけたのですが、惨状を目のあたりにして思わず立ちすくんでしまいました。二の足を踏むユーファに、「小さなさきやき」が聞こえたような気がしました。「あなたは末日聖徒。人々に光を輝かせなさい。強くなって、我慢して、勇気を出して、助けに行きなさい。」ユーファはその声に力を得て、ひとつ深呼吸をすると、車輛の下から人を引っ張り出したり、病院移送の用意をしたり、とにかく鳥肌の立つような仕事にとりかかりました。

あたり一面血に汚れ、悪臭が漂っていましたが、ユーファは決然として立ち働きました。やがて重いガソリンタンクにつぶされそうになっている女性を見つけたので駆け寄ると、その女性は妊娠中でした。それも出産間近な様子でした。そして、タンクをどけている最中に赤ちゃんが生まれました。当惑したユーファはその場から離れました。勇気をもう一度振るい起こすのに時間が必要だったのです。

ユーファが落ち着く場所を求めて放心したように手探りで歩いていると、突然ひとりの婦人が棒を振り上げて、「おまえのために私の子供たちが死んだんだ！おまえたち

が怠けたせいで、油断したせいで何てことになったか、よく見てごらん！」と怒鳴りながらユーファに向かってきました。ユーファは後ずさりしてその女性の手から逃がれましたが、彼女の勢いには面食らってしまいました。彼女はその事故で2児を失い、ひとりの遺体はまだ見つからないというので半狂乱になっていたのです。可哀想なその母親は、ユーファの制服を見て鉄道員と間違えたのでした。

ユーファは一生懸命心を落ち着けて、自分は鉄道で働いているのではない、救助を手伝いに来ただけだと説明しました。3人の警官が騒ぎに気づいて、逆上しているその女性に、ユーファに危害を加えれば逮捕すると警告しました。

「もし私があのお母親だったらどうかしら」とユーファは考えました。「私も悲しくて気が変になるのではないかしら。」ユーファは警官の方を向いて言いました。「いえ、どうかそっとしておいて下さい。悲しくて取り乱していらっしやるだけなんです。」驚いた警官は、その女性はユーファを殴ろうとしている、放っておいたらまた殴ろうとするでしょうと言いました。

ユーファはそれに答えて言いました。「いえ、そんなこと、怖くありません。神は私たちがみんな兄弟姉妹だと教えておいでです。私たち、お互いに愛し合わなければいけないんです。この方は私を叩いたりしません。」

警官は疑わしげに女性をつかまえていた手を放し、ユーファはまた仕事に就きました。胸が裂かれるように辛い、困難な仕事は、それから何時間も続きました。

数時間経った頃、救援者の間にO型の血液の人はいないかと声がかかりました。少

女の手術にO型の血液が必要なのに病院にはもうないというのでした。血液がなくて手術できなければ、その子は助からないということです。ユーファが名乗り出て、車でそのまま病院へ直行し、必要な献血をしました。彼女はそれまで献血をしたことがありませんでしたが、緊急事態のため、普通の採血量より多い血液が取られました。病院にも職員にも緊迫感が漂っていました。ユーファは採血した後は休まなければならないことを知らなかったので、すぐ病院を出て、また事故現場へ戻りました。

日暮れ近くになると大変な仕事もようやく終わり、ユーファの思いは子供たちに飛びました。帰宅の準備はすんでいます。しかし、帰る前にボランティアの人たちはユーファが先ほど献血した病院に集合するよという通達が、鉄道当局から出ていました。責任者が会ってお礼を言いたいというのでした。

公衆衛生局長からも感謝の言葉がありました。その話の最中に、事故で悲しみに打ちひしがれたさっきの母親が、だれかを捜しながら部屋に入って来ました。一緒にいた医師が、「ユーファさんはおられませんか」と叫んでいます。ユーファは自分のことと認めざるを得ないと観念し、ためらい気味にうなずきました。するとすでにユーファを見つけていたその母親が駆け寄ってきてユーファを抱きしめ、そして泣き出しました。

ユーファはそれにとまどい、医師の方を見ると、「あなたの献血でこの人の娘さんが助かったんです。お礼が言いたくてこちらまで伺ったわけです」と言われました。

涙ながらに感謝を述べる母親に、ユーファの顔には安堵感が広がりました。母親は

言いました。「どうして、そんなに平気でいられるんですか。私が怒って殴りかかった時もあなたは平静だった。なぜ、どうして、そんなふうでいられるんですか。」

ユーファの返事は、先に警官に言ったことと同じでした。「教会では、私たちはみんな兄弟姉妹だからだれでも、どういう人でもお互いに愛し合わなければいけないと教えています。」

このやりとりを、公衆衛生局長のマーチン博士が見ていました。彼は、いったんは悲嘆にくれ、今は喜びに泣く母親に対して執ったユーファの態度に強い感銘を受けました。

そのマーチン博士というのが影響力のある人で、以前に宗教部を管轄する教育局の局長を務めていました。末日聖徒の宣教師にビザ制限を課していたのがこの宗教部でした。マーチン博士はユーファに好印象を受けました。彼女が難しい状況を立派にさばくのを見て、博士は末日聖徒の宣教師の働きの実を認め、ビザ制限の緩和に尽力すると約束してくれました。

一方、感謝でいっぱい母親は、教会と教会の教えについてユーファにあれこれ聞きました。

「子供の葬式がすんだら、おたくの教会に行ってもいいですか。」

「はい、いつでもいらして下さい。」ユーファは答えました。

いろいろなことがあった長い1日もようやく終わりました。もちろん疲れ果てていました。でも「みたまのささやき」に従い、信仰を实践したという温かい気持ちに満たされて、ユーファは子供たちの待つ家へ急ぎました。



彼女は 貧しさを 捧げました

マーサ・P・テイサム

私がチャンドラー姉妹のお宅に伺ったのは2月の寒い日でした。ノックをし、聞こえないと悪いのでドアを細めに開けて「こんにちは、おやすみですか?」と声をかけました。

チャンドラー姉妹は、台所からゆっくりと玄関に出ていらっしゃいました。背が低くて腰が曲がっていて、歩くと少しびっこをひかれます。綿のロングスカートが、だるまストーブにくべる石炭でその日も汚れていました。小さな家の中を暖めるストーブからは、始終目が離せないのです。白い

髪にも石炭の汚れがつき、疲れたお顔に79年の苦労がしのばれました。しかしそれは、冬をしのぐに十分な石炭と少しばかりの食べ物があればそれだけで幸せですという穏やかなお顔でもありました。

彼女が月わずか59ドルで生活していらっしゃることを初めて知った時、私はまさかと思って目を丸くしたものでした。2部屋だけの家で、ひと部屋には温度調節ができないストーブとダブルベッド、古びたソファ、それに傷んだ衣装ダンスのセットが置いてあり、もうひと部屋の台所には、小

さなコンロとテーブルに椅子が2脚、棚になべ類や食器と、食料が少し置いてありました。初めてお会いした時は、水道もお風呂もなかったのです。

夫が彼女のホームティーチャーになった数年間、私たちは時々ふたりで訪問しました。夜の訪問だと家の中が決まって真っ暗で、ノックすると裸電球がとまり、訪問を終えて車が動き出すとすぐ消えるのでした。

チャンドラー姉妹が教会に入られたのは結婚したの頃です。御主人が教会員でした。彼女は支部もステーク部もなかった当時のことをよく覚えています。教会との接触は、時々やって来るひとりかふたりの宣教師を通じてしかありませんでしたが、彼女は信仰をしっかりと守っていました。インフルエンザが流行した1918年にふたりのお嬢さんを亡くした際、証によって支えられたという体験を、いつぞや伺ったことがあります。

以前私が2、3カ月扶助協会会長であった時、彼女から境遇についてのぐちを聞いたことはありませんでしたし、教会に援助を求めてこられたこともありませんでした。でもお宅をふたりで訪問して、お金がなくなった頃には食べ物をお持ちし、月末の福祉年金が届く1週間位前には、どんなご様子か私が必ず訪ねることにしていたのでした。

私の訪問を受けたチャンドラー姉妹は目を輝かせました。「さあ、どうぞ！ ちょうどお昼をいただいていたところです。」チャンドラー姉妹はおとなしい方で、いつもささやくように話をされます。

「どうぞ、そのまま召し上がって下さい。

お食事しながらお話できます」と私は言いました。

そっと彼女のひじを支えて、一緒にゆっくり台所の方へ歩いて行くと、チャンドラー姉妹はタンスの前で立ち止まり、一番上の引出しから何かを取り出しました。その時彼女の昼食にちらっと目をやると、小麦粉と水で作ったおかゆだけでした。

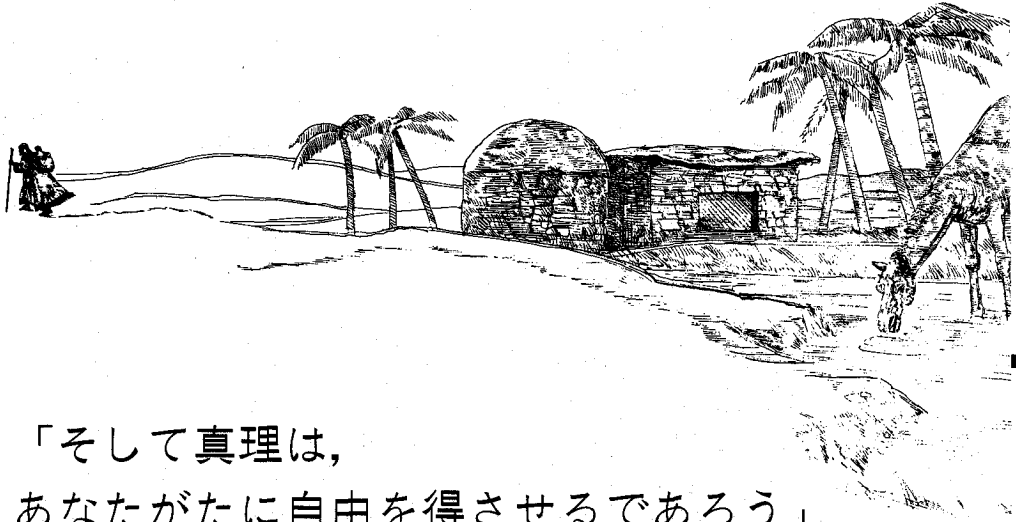
「チャンドラー姉妹、失礼ですが食べ物は今それだけなのですか。」

「はい、そうです。でも大丈夫ですよ。きょうあすにも年金が届きますから。ねえ、これ、監督に届けて下さいませんか。」チャンドラー姉妹はしわの寄った献金の封筒を私の手に握らせました。「今月はホームティーチャーがいらっしゃらないし、自分ではもう教会に行けないんです。これ、什分の一です。どうぞ渡して下さい。」

私は灰色の封筒をじっと見つめました。「いいえ、主はあなたに什分の一を求めてなんていらっしゃいません」と言いたい思いが胸にいっぱいでしたが、心の底で小さな声がささやきました。「この人の祝福を奪ってはならない。」

私はけんめいに涙をこらえてそそくさと挨拶し、彼女に差し上げる食物をそろえに車を飛ばしました。

チャンドラー姉妹はもうこの世にはおられません。でも私は、犠牲について、真心について、彼女が教えて下さった大切な教訓をいつも思い出します。チャンドラー姉妹にとっては、主に対する責任を怠ることよりひもじさに耐えることの方がたやすかったのです。



「そして真理は、 あなたがたに自由を得させるであろう」

十二使徒評議員会会員 ジェームス・E・ファウスト

ピラトは「真理とは何か」（ヨハネ18：38）と問いかけています。これは、人類が長い間、尋ね求めてきた大問題です。人はだれでも自分の力で何が真理であることを知らなければなりません。次に問題となるのは、その真理をどこで見つけたらよいかということでしょう。

アメリカの牧師ラッセル・コンウェルが語った有名なダイヤモンドの話があります。

昔、ペルシャにアリ・ハフィッドという果樹園や畑、土地を数多く所有している大地主がいました。彼は金貸しもしていました。家族にも恵まれ、満足した毎日を送っていました。お金の困ることもなかったから満足した生活もできたし、満足した生活をするからまたお金も貯まっていくという状態でした。

ある日、ひとりの年老いた祭司がアリの

ところに来て、親指くらいのダイヤモンドがあれば、このような農園を12も買うことができると言いました。アリは尋ねました。「そのダイヤモンドはどこで見つけることができるか教えて下さい。」

祭司は言いました。「高い山の間を流れる川の白い砂地のところを捜しなさい。その白い砂の中に、ダイヤモンドがきっとあるでしょう。」

「それじゃ、さっそく捜してみよう。」アリは決心しました。

アリは自分の農園を売り、貸していたお金を集め、家族の世話を隣人に頼んで、ダイヤモンドを捜しに出かけました。アリは方々の地を巡って旅を続けました。

一方、アリの農園を買った人がある時、らくだに水をやっていた。らくだが浅瀬に鼻をつけて水を飲もうとした時、その



男は流れの底に何か不思議な光を放つものがあるのに気がつきました。水の中から拾い上げてみると、黒い石の表面に目のようなものがあってそれがきらきらと輝いているのです。それから間もなくして、この男の家を訪れたあの老祭司は、黒い石の中で放つものがダイヤモンドであることを知りました。ふたりは農園に飛び出し、指で白い砂をかき分け、無数の美しい高価な宝石を手にしたのでした。これが古代史上最大のダイヤモンド鉱山と言われるゴルゴダ鉱山の始まりです。そのような訳で、もしアリ・ハフィッドが見知らぬ地を旅するよりも自分の家において地下室か畑のどこかでも掘っていれば、無数のダイヤモンドを見つけたことができたでしょう。

真理の探究もアリ・ハフィッドがダイヤモンドを捜しに出かけたことと似ていると

ころがあります。真理はどこか遠方の地にしかないように考えることがありますが、本当は私たちの足元に横たわっているのです。

ウィンストン・チャーチルは、「人は時としてほとんど偶然としか思えないような真理との出会いを経験する。しかしほとんどの人がそのことに気づかないでいる」と言っています。

歴史上最も重大な裁判のひとつは、ソクラテスの裁判でしょう。アテネの法廷で彼が有罪を宣告された理由はふたつありました。ひとつは、ソクラテスが無神論者であり、当時の一般に信じられていた神を信じなかったからです。2番目の罪状は、ソクラテスが若者たちに、アテネ社会を牛耳っている賢者と呼ばれる人たちの言うことが真実なのかどうか自分自身で吟味してみるように影響を与えたことです。それが「若者たちを墮落させた」ということになったのでした。ソクラテスは501人の陪審員の多数決によって有罪となり、獄で処刑されました。

真理に到達するという点に関して教会の指導者は、若人が自分の力で考え、真理を捜し求めるように励ましています。若人はよく考え、研究し、よく検討した上で、自分の良心の導くままに神のみたまによって真理を知るようにならなければなりません。

ブリガム・ヤングは次のように述べています。「私は、この民が指導者をあまりにも信頼し過ぎて、自分たちが神によって導かれているかどうか自分自身で神に尋ねようとしなくなることをことのほか憂慮している。私は彼らが、盲目的な自己保全の状

態の中に安住してしまうことを怖れている。……男女を問わずすべての人々は、神のみたまのささやきによって、指導者が主の導かれる道を歩んでいるかどうか自分自身で知るように努力しなければならない。」(*Journal of Discourses*「説教集」9:150)このようにすれば、いかなる人も欺かれることはないでしょう。

探^{さが}し求めることは、その真理が霊的なものであれ、科学的なものであれ、あるいは道徳的なものであれ、すべての真理を知る鍵です。

イエス・キリストの福音が回復され、それに伴っていろいろな事柄が明らかにされたのは、14歳の少年ジョセフ・スミスが次の言葉に導かれて真理を尋ね求めたからです。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」(ヤコブ1:5)

長い間の法廷での経験を通して、公正さを得るという意味での真理は、徹底的にそれを追究することによってのみ到達し得ることを私は学びました。

教会員は対象が書物であれ何であれ、あらゆるものから学問を求めるように勧められています。なぜなら、「もし何にても、徳高きこと、好ましきこと、よき聞えあること、あるいは褒むべきことあらば、われらはこれをたずねもとむるものなり」(「信仰簡条」13条)とあるからです。

シバの女王はソロモンの名声を聞き、その評判の知恵と富、豪華な邸宅がうわさに違わぬものかどうかを見るために、ソロモ

ンのもとを訪れました。聖書には、「難問をもってソロモンを試みよう」と(歴代下9:1)したと記されています。シバの女王はソロモンの答えに満足を覚え、次のように言っています。「わたしが国であなたの事と、あなたの知恵について聞いたうわさは真実でした。」(歴代下9:5)

この世に生を受けた人ならばだれでも一度は考え、そして自分でその答えを見いださなければならない根本的な問いについてアミュレクはモルモン経の中でこう述べています。「私はあなたたちの胸の中には、神の道がはたしてその御子(イエス・キリスト)にあるか、またはキリストが本当に降臨したもうかと言う大きな疑問があることを知っている。」(アルマ34:5)

しかし尋ね求める人々の中には、真理を求めないで論争に走る人がいます。誠実に学問を求めようとせず、議論をすることを望み、見せかけの学問を誇示し、争いを起こそうとするのです。

パウロはテモテに宛てた手紙の中でこう言っています。「愚かで無知な論議をやめなさい。それは、あなたが知っているとおおり、ただ争いに終るだけである。」(Ⅱテモテ2:23)

私たちは皆、自由意志を授けられています。したがって、主からの靈感、善と悪、真理と偽りを見分けて最終的な決定を下すのは、私たち一人一人の責任です。J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は次のように語っています。

「教会は、教会幹部が語る言葉が『聖霊によりて感ずるままに』語られた言葉かどうかを聖霊の証を通して教会員に告知ら

せるであろう。そして時至らば、その知識は明らかにされるはずである。」人は皆、自分の最大の幸福を産み出す価値について、それを受け入れるかあるいは捨て去るかの選択をしなければならないのです。

「真理とは何か」というピラトの問いかけについて考える時、フランシス・ベーコンの次の言葉を参考にしてみてください。「真理には3つの領域がある。ひとつは疑問を持つこと、すなわち尋ね求めることである。次に、知ること、すなわち存在を認めることである。第3に、信じること、すなわちそれを楽しむことである。」

ハロルド・B・リー大管長は、あらゆる所で教会の指導者に、時間をとって心によく思い計るように、世事を離れてよく自己を評価するように勧告してきました。これは私たちすべてにとって非常に意義ある勧告です。

私たち一人一人が知識と真理に到達する鍵は、教義と聖約の9章に記されています。そこには、「心の中によく思い計り、……そして願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん」(教義と聖約9:8)と約束されています。

数多くの事実を集めることは非常に有益で効果のあることですが、そこでも尋ね求める気持ち(探究心)を忘れてはなりません。「真理は精緻で寸分の狂いもない部分から成り立っているものではなく、全体として正しい印象を伝えるものである。そこには単なる事実が語る以上の真理の広がりがある。詩篇の作者は、『人々があなたのおきてを守らないので、わが目の涙は川のように流れます』と記している。作者はここで

事実を述べてはいないが、事実以上に深い真理を述べている。」(ヘンリー・アルフォード)

神のみたまの導きによって熱心に求める人々は、みただけでなく、真理を求める人々の助けを受けることができる。トマス・カーライルは次のように述べている。「私たちの心の中から出てくる純粋な真理には、真理を愛するすべての人々の心を魅了するものがあることを、私は知っている。」

真理の探究について、シェークスピアが『ハムレット』の中で述べた名言には時代を超越した重みがあります。「いちばん大事なことは、おのれに誠実なれ、ということだ。さすればかならず、夜が昼につぐごとくにじゃな、他人に対しても誠実ならざるを得ん。」(『ハムレット』三神勲訳)

しかし真理について述べられた救い主の言葉ほど偉大なものはないでしょう。「また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。」(ヨハネ8:32)さらに救い主はこう続けています。「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。」(ヨハネ14:6)「だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける。」(ヨハネ18:37)

自分をより向上させようと努力している人はだれでも、謙遜に正直に尋ね求め、自分の思いと知識、そして生活の中でどこに真理があるか見極めなければならないのです。



かつて、家が隣合わせのふたりの少年がいました。ふたりは同い年でしたが、どうも仲良くできないでいました。そんなある日、すべてのことが変わり始めたのです。ここに載っているのは、そのふたりの少年が最近アーバダ・コロラドステーキ部アップルウッドワード部で述べた証です。ふたりは現在そこで執事の職にあります。

「愛する兄弟姉妹の皆さん、ぼくはきょう友情ということについて話したいと思います。特にぼくがある少年とどのようにして真の友人になれたかについて話したいと思います。その少年の名前はマットと言います。ぼくは彼をよく『いじわるマット』と呼んでいました。彼はそれに腹を立て、ぼくにけんかをふっかけてきました。そしていつもげんこつのなぐり合いから石のぶつけ合いになりました。ぼくは腹いせにさんざんに彼をなぐりつけました。彼はよく目をはらしたり鼻血を出したりしながら家に帰りました。

ぼくはいつもこの友だちの注意を引いて、しっと心を起こさせようとしてきました。彼は腹を立ててぼくにかかってこようとするのですが、けんかではたいていいつもぼくが勝つのです。それでも時々、ぼくをう

「一番いやな奴」 を教会に 連れて来る

話

シヨーン・ベル
マット・テイラー



らやましがらせることがありました。それは彼が新しい自転車を買った時や家族そろって何かをする時です。そんなある晩、彼はぼくを家庭の夕べという会に招待してくれたのです。ぼくが教会に関心を持ち始めたのはその時からです。あとになってぼくはバプテスマを受けました。

この話はぼくの隣人マット・テイラーとの本当の話です。ぼくたちはふたりともとても活発な教会員になりました。スカウト活動もやっています。今ではけんかもせず何の問題もなく一緒にいろいろな活動をしています。ぼくは感謝しています。マットがぼくを教会に連れて来てくれたことを感謝しています。みなさんもだれか友だちを教会に連れて来られるように願っています。そうすれば彼らもきっとぼくと同じような気持ちを味わえるでしょう。」(ショーン・ベル)

「愛する兄弟姉妹のみなさん、ぼくはみなさんもよくご存じのぼくの隣人ショーン・ベルとの友情について話したいと思います。

ショーンが隣に引越して来たばかりの頃、ふたりの間にはいつも問題がありました。ぼくがショーンと会った最初の日、彼はぼくにおもちゃのトラックを投げつけました。

それが顔にあたり、ぼくは鼻の下と左目の上を切ってしまいました。

また幼稚園では、ぼくが午前のクラスでショーンは午後のクラスでした。ショーンはよく幼稚園に行く途中、家に帰ろうとしているぼくを待ち伏せしました。そしてぼくをなぐってから幼稚園に行きました。ぼくは鼻血を出したり唇をはらしたりして家に帰ることがよくありました。

ぼくは9歳の時バプテスマを受けて教会に入りました。ちょうどショーンがぼくと一緒に教会に行き始めた頃です。そして去年の2月、彼はバプテスマを受けて教会に入りました。ショーンとぼくが一緒に教会に行くようになってからふたりは兄弟のようになり、スカウト活動も楽しくやるようになりました。スカウト活動のおかげで、ショーンとぼくはたいした問題もなく何でも一緒にするようになりました。

この話から本当の友情というもののがわかってもらえたらうれしく思います。みなさんも『一番いやな奴』のうちのひとりを教会に連れて来られるように願っています。ぼくは教会が真実であることを証します。」

(マット・テイラー)



聖典腕だめし

ジョン・A・トベトネス

「歴史は繰り返す」と言われているのは御存じでしょう。これは、いろいろな意味で興味深いことです。でも、聖典の中にも同じか、あるいは似たような出来事が繰り返し出てくるという事実を発見するならば、もっとこのことに興味を覚えるに違いありません。

これから幾つかの例を挙げますので、標準聖典の中にそれと同じような場面がどのくらいあったか思い出して下さい。

それぞれの例に対してひとつずつわかれば、ある程度聖典を読んでいるか日曜学校のレッスンを大変よく覚えている人です。

ふたつずつあげられれば、セミナーかインスティテュートの教師になれるかも知れません。

わかったのが全部で5つ以下の方、あなたは毎日聖典を読むことを考えて下さい。

I. 少ない食べ物が大量に増える

1. _____ 2. _____ 3. _____

II. 水がふたつに分かれて人々が通れるようになる

1. _____ 2. _____ 3. _____

III. 死んだ少年が生き返る

1. _____ 2. _____ 3. _____

IV. 命を守るために、妻を妹であると言

う

1. _____ 2. _____ 3. _____

V. 地上に3日間の暗やみが続く

1. _____ 2. _____ 3. _____

VI. 予言者の前に光の柱が現われる

1. _____ 2. _____ 3. _____

VII. エライジャとモーセが鍵を授けるために戻ってくる

1. _____ 2. _____ 3. _____

VIII. 海を渡って約束の地に到着する

1. _____ 2. _____ 3. _____

IX. ききんから逃れるためにエジプトへ旅する

1. _____ 2. _____ 3. _____

X. 王の夢を釈くように求められたイスラエル人が他国の総督になる

1. _____ 2. _____ 3. _____

XI. 地に倒れたり示現を見たりすることによって不信者が改宗される

1. _____ 2. _____ 3. _____

解答：聖典には、このほかにも似たような状況が幾つかあると思いますが、ここで

は一応の解答例を挙げておきます。

- I. エリヤは、ザレパテのやもめ女のパンと油を増やしました。(列王上17:10—16) また、彼の後継ぎのエリシャもパンと穀物で100人の人々を養いました。(列王下4:42—44) これと同じような方法で、イエス・キリストも魚とパンを5千人に分け与えられました。(マタイ14:13—21; マルコ6:30—44; ルカ9:10—17; ヨハネ6:1—14)
- II. これは、イスラエルの民がカナンへ向かう途中2回起こりました。1回目は紅海で(出エジプト14:21—30), 2回目はヨルダン川です。(ヨシュア3, 4)
- III. エリヤはこのような奇跡を行ないました(列王上17:17—24)が、彼の後継ぎであるエリシャもそうでした(列王下4:18—37)。
- IV. アブラハムは、自分の命を守るために2度この方法を使いました。(創世12:10—20; 20:1—18) また、その息子イサクも父の模範になりました。(創世26:1—11)
- V. 出エジプト記時代、エジプトは暗やみという天災に見舞われたことがあります。(出エジプト10:21—23) また、キリストが十字架におかかりになった時、アメリカ大陸には3日間の暗やみが続きました。(IIIニーファイ8:1—10:9) 同様に、旧大陸は3時間の暗やみに包まれました。(マタイ27:45; ルカ23:44—45)
- VI. 聖典ではまず、何度かにわたってモーセがそのような火柱を見えています。

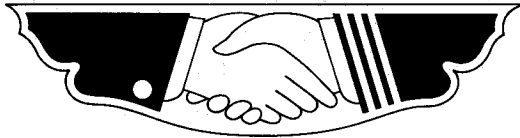
(民数9:15—17; 雲の柱 出エジプト33:7—11, その他) そのほかでは、リーハイ(Iニーファイ1:6) ジョセフ・スミス(ジョセフ・スミス2:16—17, 30, 43)に火柱あるいは光の柱が現われました。

- VII. これは、変貌の山でペテロ、ヤコブ、ヨハネに1度(マタイ17:1—4), カートランド神殿でジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリに1度(教義と聖約110:11, 13—16)起きています。
- VIII. まず、ノアが西半球から東半球へ渡りました。(創世7, 8) 一方ジェレド(イテル6), ミュレク(オムナイ14, 16; モーサヤ25:2), リーハイ(Iニーファイ17, 18)は、逆に東半球から西半球へと移動しました。
- IX. アブラハム(創世12:9—10)とその孫ヤコブ(創世42—45)は、ききんを逃れるためにエジプトへ移されました。
- X. これは、ヨセフ(創世41)とダニエル(ダニエル2—4)に起こりました。
- XI. これは、アルマの息子の上に起きました。(モーサヤ27:10—32; アルマ36:6—10) また、ラモーナイ王と^{モモカ}后、その僕(アルマ19:1—29), さらにラモーナイ王の父親(アルマ22:17—26)もそのような経験をしました。

さらに詳しく知りたい方は、聖句を参照して下さい。

公正な異邦人

ウイリアム・G・ハートリー



過 去 150 年間、教会は憎悪の波を幾度かくぐり抜けてきました。教会歴史をひもとけば、襲撃、殺人、放逐、新聞や小説家から受けた嘲弄^{ちやうろう}、反モルモンの法律、地方や連邦の偏見を持った役人、宣教師への冷淡な待遇が子細に語られています。しかし、一方で不偏な目を持った非教会員が、好意的な立場や中立的な立場から教会員の擁護に立ち上がり、あるいは教会員の実態を公平にとらえようと努めたことを忘れてはなりません。次にそのような教会外の人人から寄せられた助力を想起しながら、感謝を新たにしたいと思います。

パルマイラ

スミス家を知っていた住民はごく少数で

した。ところが1830年代に、反モルモンの作家がこの変わった新興宗教を叩こうとして、パルマイラの住人から、ジョセフ・スミスと家族を怠け者のろくでなし呼ばわりする供述書を取りました。スミス家を身近に知る隣人たちの見方はそれと違っていました。その中のひとりであるオーランド・ソーランダズ氏は、迫害を受けていたスミス家族の人柄をこう記述しました。

「私はスミス家の皆さんをよく知っていました。……親父^{おやじ}さんは桶や樽の製造、修理をしていて、何日もうちの仕事をみんなですてくれました。みんないい人たちでした。ヤング・ジョー（と呼んでいたのですが）あの子は私の仕事をしてくれて、実に働き者でした。……病気の時などは近所一番の頼りになる一家で、私の父が死んだ時



はひとりが始終つききりで手伝ってくれたものです。みんなが、スミス家の人たちは正直者だと思っています。ここを発つ時に幾らか金を貸したのですが……引越して行ってから1年位して、ひとりが借金を返しにわざわざ戻ってきたほどです。』¹

ジェームズ・K・ポルク夫人

〔ワシントンD. C. 1846年〕

モルモン教徒の男女子供が、住む家もなくインディアンの土地に仮住まいしていました。ノーヴーからの避難民でした。テントや幌馬車や粗末な丸太小屋が、貧窮と飢餓に常時見舞われていました。こうした苦境は東部の富裕な人々の胸を打ち、アイルランドのじゃがいも凶作で大量の餓死者が出た時には、すぐさま義援金や食糧が集められたのでした。そこでモルモンの長老たちが教会外の援助を求めに東部へ派遣され、窮状を説明した際も、豊かな人々は再び同情を示しました。

ワシントンD.C.の新聞、「デーリー・ユニオン」²はこう書いています。「(アイルランド人を援助した) 同じ人々が一千五百の同国人を平穏な家から追放し、飢えと寒さで

行き倒れにさせたと言わせてよいものであろうか。そうではないことを望むものである。」続いて「モルモン教徒救援の婦人ティー・パーティー」の広告が載り、新聞社の報告によれば、1846年10月にワシントンで盛大なティー・パーティーが開催され、有名人が多数出席しました。

「市長や牧師を先頭に町中のあらゆる階級、宗派の婦人たちが、この事業に熱心に協力したことを、この場で報告しよう。マジソン前大統領夫人、ポルク(大統領)夫人、マコム大将夫人、その他有力者、有名人、首都の麗人たちがこの慈善事業にこぞって参加した。」

客は50ドルの切符を買い、賛助出演のマリーン楽団と人気ボーカル・グループの演奏を聞きました。数軒の家がモルモン避難民宛の衣料と寄付金を集める場所になりました。

トーマス・L・ケーン大佐

〔フィラデルフィア 1850年〕

ペンシルベニア歴史協会の会員たちは、トーマス・L・ケーンが立って演説を始めると静まりました。ペンシルベニアの名門



であり、著名な判事の子息であったケーン大佐は、ノーヴー脱出のモルモン教徒の間で見聞した西部の状況について正式な書状を読み上げました。彼は、ノーヴーを逃れる様子、避難民の貧困と悲惨な状態、モルモン大隊の召集に快く応じたことやユタにおける開拓の状況について、雄弁に説明しました。

演説が好評だったため、ケーン大佐は、モルモンの長老の勧めもあり、それを「モルモン教徒」と題する84ページの「実に立派な」本にして出版しました。ケーン家がふたつの版それぞれ千部ずつを出した費用を持ち、上院議員全員、下院議員の大半、大統領、行政府幹部、その他有力者に一部ずつ送りました。

彼が聖徒たちにこれほどの関心を寄せたのはなぜでしょうか。ケーン大佐は、フィラデルフィアのモルモン教徒の大会に出る4年ほど前から、モルモンに興味を持っていました。その後、ジェシー・C・リトル長老とモルモンの思想について数時間も話し合い、ワシントンD.C.でのリトル長老を支援する手紙を書き、さらには彼に同行して、モルモンの避難キャンプを訪れたのです。ケーン大佐は、あるテントの近くで、聖徒のひとりが一心に祈っているのを漏れ

聞きました。その大佐の目から涙がこぼれました。「あなたがたの真剣で必死な気持ちがよくわかりました」と、大佐はリトル長老に語っています。

ケーン大佐は避難キャンプで重い病気にかかりました。手厚い聖徒たちの看護によって回復しましたが、その間モルモン教徒の日常生活をよく見ることができました。彼は東部へ帰る途中で、荒廃したノーヴー市に立ち寄りました。ニューヨークのアルバニーでは危篤寸前まで病状が悪化し、死を予想した大佐は判事である父親に、もし権限があるならば連邦政府が聖徒たちに強硬措置を加えないようにして欲しいと通知しました。大佐は一命を取り留め、得てきた情報をじかに歴史協会に披露したのでした。

ケーン大佐が出版した演説を、モルモン教徒に同情的すぎると批判した人たちがいました。大佐はその意見を踏まえつつ、第2版では次の序文を加えて自説を貫きました。

「私は取り急ぎまとめた演説に対して受けた批判に、憤怒の情を禁じ得ない。好意的な友人でさえ、モルモン教徒が早く世間に受け入れられるために、彼らの側に立つような論調は慎んだ方がよいと勧める。し



かし私にできることは、主張をより明確にすることのみである。真実は真実以外の何物でもない。私は、モルモン教徒がいかなる点においても我々の道徳水準を下げる人々ではないことを断言し、廉直と通常社会の平均を越えた清廉な人格とが、私が西部で交際した人々の身上であることをとくと御理解いただきたいと願うしだいである。」

ケーン大佐は一生涯、教会の「東部における番人」となりました。ワシントンD.C.の政情について教会指導者に話し、ある時などはジェームズ・ブキャナン大統領により派遣された連邦軍とモルモン教徒の調停のため、率先してパナマを経由、ユタへ向かいました。1873年には、初めて妻を伴い、再度ユタを訪れました。ヤング大管長の案内で南方にあるモルモンの村々を視察してまわったケーン夫人は、率直な感想を手紙や日記に綴っています。夫人の父君が、1874年に彼女のユタ関係の文書をもとに、「現今議会の敵意ある法律に威嚇を受けているモルモン教徒に対して、同情を喚起する」ため、「モルモンの12の家庭」³という本を出版しました。

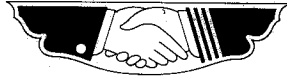
チャールズ・ディケンズ

〔リバプール 1863年〕

英国では、有名な作家でありジャーナリストでもあったチャールズ・ディケンズの発行する「オール・ザ・イヤーズ・ラウンド」という雑誌を、多くの民衆が読んでいました。1863年に、ディケンズは、リバプールの棧橋から移民船「アマゾン号」⁴が出航する模様を取材し、記事にしました。モルモン教徒の一行が乗船することを知っていたディケンズは、「言うに足れりとあらば、もっともそのはずだと自分では頭から信じ込んでいたのだが、彼らを論駁しようと思ひ、」一緒に船に乗り込みました。

しかしディケンズは、同行してみても驚いたと読者に語っています。「腹黒い人間、酒に溺れた人間、ろぎたなくののしったり下品な言葉を使ったりする人間がひとりもない。」そしてそれまで見てきた移民たちと比較して「この人々はまるで違っている」と言い、長々とした随筆を書いたのです。

「彼らは2時間もかからずに乗船し、全部の昇降口に独自の見張りを立てた。9時前には船内は整然とし、軍艦さながらに静まりかえった。」終わりにこう述べています。



「800 人もの団体があのような美しさ、あのように頼もしい見事な働きぶりを見せるのを他に見いだすことはできないであろう。」ディケンズは脚注の中で、1854年に下院特別委員会が、英国旅行者条令の下でも、船舶の快適さ、安全性においてモルモン教徒の移民船ほどに信頼できるものはないと報告した一件を紹介しています。

チャールズ・アレクサンダー・ドニファン

〔タバナクル 1874年〕

大管長会に、モルモン教徒迫害当時のミズーリ民兵指揮官がユタへ向かって来ているという情報が入りました。ヤング大管長の副管長であったジョージ・A・スミス長老は、すぐさまタバナクルで開かれていた日曜日の集会の席で、彼に賛辞を送りました。⁵その後、大管長会はアレクサンダー・ドニファン将軍を伴い特別列車でユタ州プロボへ行き、周辺を案内し、美食を振る舞ったのでした。彼がそのようなもてなしを受けたのはどうしてでしょうか。スミス長老はタバナクルでの説教の中でこう言っています。

「迫害の長い道程の中、民は時折、正義

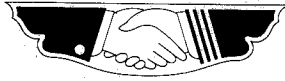
の擁護に巨星とも言うべき人々に恵まれている。それは、侮辱される人民が、たとえ……『モルモン教徒』という不評判な呼称を持っていても、そのために被る不人気をもともせず、暴徒たちの暴力、殺人、虐待、あるいは財産の破壊、基本的人権の蹂躪^{じゅうりゃく}に公然と抗議する人々である。」

ミズーリで、ドニファン将軍はそのような「巨星」⁶であることを自ら示しました。彼はミズーリ時代の大半を教会代理人として働き、州議会に選出されると、新しく北方にふたつの郡を聖徒たちの避難地区として設けるのに尽力しました。そして、民兵指揮官として、ジョセフ・スミスを殺害せよというサミュエル・D・ルーカス将軍の理不尽な命令を拒み、ルーカス将軍にこう警告したのです。

「それは残忍な殺人です。小官は閣下の命令には従いません。わが隊は、明朝8時、リバティーに向かいます。もし閣下がこれらの人々に刑を執行されるなら、神に誓って法廷の前に閣下の責任を問う覚悟があります。」⁷

ヒューバート・ハウ・バンククロフト

モルモンの長老2名が、テネシー州ケー



ン・クリークでひとりの暴徒の手にかかって亡くなってから10年にもならない頃、モルモン教徒ではない立派な学者が、公正な目で見たモルモン教徒の歴史を初めて世に出しました。パークレーにあるカリフォルニア大学の有名なバンクロフト図書館は彼の名にちなんだものですが、そのヒューバート・ハウ・バンクロフトは、ユタも含めて西部諸州の州史をまとめようとし、助手たちと共に、何年もかけて西部に関連する資料を山と集めました。中に、教会歴史家から得た詳しいユタの歴史も含まれていました。そして1889年、バンクロフトの手になる「ユタの歴史」が発行されたのです。それは、「19世紀におけるおそらくは最も優れた、最も偏見のないユタの歴史」と評価され、いろいろな形で聖徒たちの弁護、擁護に役立ちました。⁸

1896年にユタがついに州になると、反モルモンの風潮も時折思い出したように小暴発を起すだけで、下火になりました。20世紀の初め、国民はモルモン教徒を無視するか、せいぜい珍しいものを見るといった風でしたが、以後聖徒たちがユタ州を出、政治、経済、教育界に頭角を現わすにつれ、モルモン思想は容認どころか賞賛さえ受けようになりました。

トーマス・ニクソン・カーバー

その好意的な評価の例が、ハーバード大学の農業社会学者トーマス・ニクソン・カーバーの見解です。彼は1922年4月6日に総大会を見学した際、驚いたことに説教を依頼されました。カーバー氏はそれに応じ、自分がモルモン教徒のいろいろな町を研究し、「大小の地域社会で、共同体建設の技術、学術が機能しているのを見た。これは国家建設の縮小版であり、どの共同体に対しても手放しの賛辞を呈したい」と述べています。

また別の折に、彼はこう語っています。「私はこれまで、モルモンの社会に見られる個々人の習慣ほど健全で完全なものを見たことがない。これほど放とうの徴候が少ない民と交わったことがない。これ以上立派に生まれ、健康に満ちた人々を私は知らない。また、子供の教育にこれほど打ち込む人々も知らない。これが故に、モルモンは入植者として、また建国者として成功したのである。」⁹

賞賛、擁護の実例をまだ挙げることはできませんが、ここに述べた教会に友好的で公正な人々のほんの数例を取ってみても、主がその民を心にかけておられ、必要な時に



教会の擁護者を立てて下さることがよくわかります。ブリガム・ヤング大管長は、トーマス・L・ケーン氏やドニファン將軍を念頭に置いて、興味深い発言をしています。「部外者のすべてが必ず異邦人とは限ら

ない。だが、手向かう類の人々は異邦人である。しかし、福音を受け入れないがそれでいてこの民を滅ぼそうとはしないイスラエルの血族は数多い。彼らはむしろ折ある毎に民を良く言い、民のために労を取る。」¹⁰

後注（原書入手の際の便宜を考え、10を除いてすべて原文のまま掲載します）

1. William H. Kelley, "The Hill Cumorah, and the Book of Mormon; the Smith Family. . . from Late Interviews, *Saints Herald*, June 1, 1881, p.165.
2. *Daily Union* (Washington D. C.), 27 October 1847; New York newspaper account reprinted in *The Millennial Star*, 9 (1847), 365.
3. Elizabeth Wood Kane, *Twelve Mormon Homes* (Philadelphia: William Wood, 1874)
4. Quoted in B. H. Roberts, *A Comprehensive History of the Church*, 5: 91-93.
5. George A. Smith sermon, 24 May 1874, *Journal of Discourses*, 17: 90-92.
6. Gregory P. Maynard, "Alexander William Doniphan, The Forgotten Man from Missouri" (BYU, Masters Thesis, 1973), pp. 27-45.
7. Joseph Smith, Jr. *History of the Church*, 3: 190-191.
8. Edward Dicey, "Religion in America," *Macmillan's Magazine*, 15 (March 1867), 447.
9. Thomas Nixon Carver address, *Journal History*, 6 April 1922; also, his quotation printed in *The Improvement Era*, 34 (June 1931), 504.
10. 監督と管理監督会との集会議事録，教会歴史部記録保管庫，1877年7月26日



先頃、私は友人から1時間半もかけて、数年前に大きな過ちを犯した彼の妻について話を聞いた。彼女は今、寝ても覚めてもその過ちのことを考えては苦しんでいるという。目的を見失い、生きる喜びをなくし、自殺もしかねない状態が続いている。彼女の中では、人間としての素晴らしい可能性がすべて停止しているのである。これは彼女自身にとっても家族にとってもつらいことである。それに、彼女のあまりに沈んだ様子に、友人や夫はやりきれない毎日を送っているのだ。

歴史家はこう言う。戦いをするのに、前

過ちを克服する

ローウェル・L・ベニオン

「神があなたに注いでおられる愛は先週の木曜日にも今もまったく変わりませんよ。」彼は信じられないようだった。そのようなことはあり得ないと思っていたからである。彼は子供のように泣いた。

線を2カ所設けてはならない。前線が分散すると、必ずと言っていいほど負け戦になる、と。それは、人生でも同じだ。人生にはふたつの戦い、すなわち外敵との戦いと自分の心の中での戦いがあるが、このふたつを自分だけで同時に戦い続けることは不可能である。また、自分との戦いに精力をつぎ込まなくていい人ほど、外敵との戦いへの備えがよくできる。実際、一歩足を踏み出せば、常にそこが戦場なのである。実りある人生を送ろうと思うなら、人生は戦いであり問題がつきまとうものであることを認めなければならない。そこには落胆が付き物である。それであるから人は、勝利という結果だけを求めるのではなく、いかに上手に戦うかを考えなければならない。

過ちは、だれにでもつきものだ。中には

重大なものもある。思慮深い人でも道徳的な罪や失敗のために苦しみ悩むことがある。教会の中に、私のほかにもそのような罪に苦しむ人がいるのであれば、ここで過去の失敗にどう取り組んでいったらよいかについて提案を試みたい。そうすれば過去の失敗のために、今の生活を犠牲にしたり、外敵との戦いの備えが何もできないというようなこともなくなるだろう。

ここに挙げるのは、挫折感や罪悪感を克服し、過去の過ちを断ち切って力強く生きていくにはどうしたらよいかについての、ほんのわずかな提案だけである。

まず、3人はぬかるみの中でいくらかもがいてもきれいになれないということをあげよう。過去のことをいつまでもくよくよ考えても、そこから何かを学び取ることはできるが、心が洗われるわけではない。弱さの中に力はなく、罪の中に強さがいないことを知っていながら、私たちは過ちや罪と真向から戦うことによってそれを克服しようとしていない。過去の失敗をいつまでもくよくよ考えていると、しまいにはそれに打ち負かされてしまうのである。

次に、私たちがこれまでの人生で何をなし、今何をしているかにかかわらず、神とキリストは以前と変わらず私たちを深く愛して下さっているということを認識する必要がある。神とキリストは罪人であろうと悪人であろうと、御自分からその人を断ち切るようなことはなされない。

私がインスティテュートで働いていた時、帰還したばかりの宣教師がやって来た。彼は重大な過ちを犯していて、自分の一生はもうめっちゃめっちゃだと考えていた。その時私は彼にこう言った。「神があなたに注いでおられる愛は先週の木曜日にも今もまったく

変わりませんよ。」彼は信じられないようだった。そのようなことはあり得ないと思っていたからである。彼は子供のように泣いた。私たちは時々こう思う。神は私たちが神の喜ばれることをした時に愛して下さり、喜ばしい少年少女、男性女性である時に愛を注いで下さると。神は愛を何かと引きかえに与えて下さるのではない。愛は報酬ではない。もしそうだとすれば、愛は応報であり、取り引きであり、報いということになる。しかしそうではない。愛はいつくしみの心から流れ出るものであり、神の愛は無条件の愛である。神は私たちのうちの最も悪い人も最も良い人も等しく愛されると、私は思っている。私たちが悪いことを行なう時や、自虐的な生活を送る時、人々を傷つける時、それらは皆主を苦しめることになるのである。

父親の方々はおわかりだろうが、自分の息子の心配をする時、息子への愛は小さくなっているだろうか。息子が問題を起こしているのに、無関心でいられる父親がいるだろうか。以前にも増して息子を愛するに違いない。イエスは、いなくなった1匹の羊を羊飼いが見つけ出して家に連れ帰った時、99匹の羊が囲いの中にいることよりも、いなくなった1匹の羊が見つかったことの方が天における喜びは大きいと言われたが、私にもその意味がわかる。

私の子供のひとりが重病にかかり、生きるか死ぬかの瀬戸際にいたことがあった。ほかの子供たちは皆元気だった。私たちは病気のその子に一層の愛を注いだものである。回復した時には、ほかの子供たちが皆元気であること以上に、その子ひとりのことでうれしく思った。その時には、病気の息子が私たちの生活の中で最も大切なこと

に思えたからである。キリストや神も同じであろう。悪いことをして戻ってきた人に一層の愛を示そうとされるに違いない。実際にその人が戻って来る前でさえも、悔い改めていようがいまいが、神は赦そうとされるであろう。神は私たちに赦すようにと言われた。悔い改めたら赦しなさいと言われたのではない。悔い改めていなくても赦しなさい。7を70倍するまで赦しなさいと。これは主が実践しておられることである。主は、御自身がしておられないことを私たちに要求するようなことはなさらないからだ。私は、福音の原則は主の生活信条そのものではないかと思う。したがって、私たちがなぜ赦さなければならないのかというと、そうすることが自らを赦すことであり、正しい生活の原則と律法にそって再び生活することだからである。聖典の中に、神が罪人に腹を立てておられる描写がいくつかあるからといって、私たちは神の愛を得るために悔い改めるのではない。聖典の他の箇所には、神が罪人ではなく罪を憎まれるという描写もあることを見落としてはならない。

過去の過ちを克服するひとつの方法として償いがある。私たちは悪いことをしてしまったとわかった時、その相手のところに足を運ぶのは時として難しいものである。自尊心があるために自分の失敗を認め難いのである。それでも勇気を持って行なう時に、そこに大きな和解を見ることだろう。感情を害してしまった人に私たちが和解を求める努力をする時、その人はそれに応える義務がある。私たちが行動に移るのが遅すぎたため、あるいは償い得ないものであるために罪を償うことができない時でも、私たちは他の人々に恵みをもたらすことは

できる。私たちはすべてこの世界の仲間であり、同じ永遠の御父を父とする兄弟姉妹であり、同じ人間社会に属する者だからである。たとえ負わせた傷の償いをすることはできなくても、別の人々の生活に恵みを与えることができるのである。

ある人々は折につけ過去を悔いている。しかし過去というものは、私たちが普通考えるほど固定したものでも不動のものでもないのだ。隠したいような過去があると、どうしてもそのことを自分の生活から切り離そうとするため、逆に心の底に根づいてしまい、いつまでたっても離れなくなってしまうのである。しかし、過去は変えられるのである。過去の特定の出来事だけを変えることは無理であるが、過去を全体的に変えることはできる。人の過去の一つ一つの出来事の重要性というものは、私たちがこれからどんな過去を残していくかによって、変わってくるのである。

数年前、ひとりの少女が私と妻に彼女の身の上で起こったあるとても悲劇的な出来事を打ち明けてくれた。彼女のその出来事について今話そうとは思わない。ただ、実にひどい経験だったということだけをおこう。この18歳の少女のような悲しい目を、私は見たことがない。彼女に慰めを与え、将来への希望を何とか持たせようとしながら、私の心に、私たちは日々の生活を通じて過去というものを形作っているという思いがわいてきた。人生というのは固定不動のもので、量で押し測れるものでもない。人生は成長するものであり、中味が大切であって、大局的にとらえなければならぬ。人生の場合、部分部分よりも全体の方がはるかに大事であり、全体がいかなるものであるかによって、各部分の意味が

決まってくるのである。すなわち、単に手で壁につかまるという動作と、体の一部として心の働きによって手で壁につかまる動作とは別である。この少女の過去のあるひとつの出来事、時には10の出来事かもしれないが、それらは彼女が落ち込んでいた18歳の時の出来事である。その後彼女は囲いの中に、つまりバプテスマを受けて末日聖徒イエス・キリスト教会に入り、キリストへの信仰を育て、夫を改宗し、家族を養い、その後ずっとこのような歩みを進めている。そうすると、彼女のこの失敗は、それひとつを取ってみれば人生の大きな谷間のような出来事かもしれないが、その後の素晴らしい人生をながめた時、それはすでに遠い過去の出来事であり、全体から見ればほんの小さなくぼみが残るにすぎない。このように考えると、人生は力強いものとなり、自分が進歩できることを知って、心に慰めを覚え、力がわいてくるのを感じるころだろ。

神は私たちの人生というものを、次のように感じておられるのではないかと思われる。エゼキエルの有名な聖句を引用してみよう。「しかし、悪人がもしその行ったもろもろの罪を離れ、わたしのすべての定めを守り、公道と正義とを行うならば、彼は必ず生きる。死ぬことはない。その犯したもろもろのとがは、彼に対して覚えられない。……」(エゼキエル18：21—22) 過去というものは、将来のその人をつくるという点においてのみ意味を持つのである。

エゼキエルはさらにこう述べている。「その犯したもろもろのとがは、彼に対して覚えられない。彼はそのなした正しい事のために生きる。主なる神は言われる、わたしは悪人の死を好むであらうか。むしろ彼が

過去というものは、将来のその人をつくるという点においてのみ意味を持つのである。

そのおこないを離れて生きることを好んでいるではないか。」(エゼキエル18：22—23) またイザヤも言っている。「……たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。」(イザヤ1：18)

このことを私は信じている。神が私たちを愛しておられるなら、私たちにこの上ない関心を持っておられるはずである。「死ぬ時まで、だれもその人を不幸呼ばわりしてはならない。その日が終わるまで、働きがなされるまで、その業を測ってはならない。」私はこう申し上げたい。人生を測ってはならない、永遠にわたって。今もなお、私たちは人生を築いているのであり、人生を変えているのであるから。

私たちは積極果敢に正しいことを行なうという望みを持ち、それを実行すべきである。多くの人は正しいことを考えていないために悪いことをしてしまう。私たちは福音をきわめて概括的にとらえている。そしてそれを結構なことだと思い、証も持っている。しかし、自分たちの信じているものの何たるかをつきつめて考えてはいない。たとえば、「私は正直になるように努めようと思うが、正直とは一体何だろう」とは言わない。また、純潔とは何か、その心髄は何か、その本質は何かとも言わない。自分の信じていること、自分の大切にしているものについて、自分で明確にできないというのであ

れば、私たちは足もとをすくわれてしまうのではないだろうか。私たちは、そうした大切なものをなぜ信じるのかつきつめて考えないために、本来ならば自分の血となり肉となるはずのものを単なる概念の域にとどまらせているのである。上にあげたような事柄は、神の律法であると同時に私たちの律法でもある。なぜなら、私たちはそれを試した上で信じるようになったからである。無関心で何もせず、ただ成り行きを見守っているだけではだめである。敵に一步先じた行動を取らなければならない。

積極的になろうではないか。自慢したり、大声をあげたり、単に口先だけで積極的になるのではない。私たちが何を信じているのかを、はっきりと述べようではないか。このことは、信者、不信者の別を問わず、また末日聖徒、カトリック教徒、ユダヤ教徒、プロテスタント教徒、無神論者を問わず、だれにでもあてはまる。人はだれでも健全な心を持たなければならない。これは、人間であるための最低条件だ。人は高潔さを身につけていなければならない。しかし、自分の信念やモットー、目標を明確にしないで、真の高潔さに到達できるだろうか。信念やモットー、目標は変えることができる。しかし、自分で持っていないかばどうすることもできない。自分の考えをはっきりさせて初めて、それに従った行動がとれるからである。たとえばあなたが銀行で働いており、お金を扱っているとす。その場合、お札を数えながら、自分は正直であるべきかどうかなどと考えることはない。そのような問題はその日の仕事にとりかかる前、また銀行に就職する前に決めておくことである。そして、朝の祈りの中で、「主よ、きょう人のお金に手をつけることがな

いよう助けて下さい」と祈るようにするのである。妻からあれが欲しいこれが欲しいと聞かされている夫にとって、お金は魔物である。魔がさしやすいためである。こうして不正直な行ないへと走ってしまうことになる。使徒パウロはこう言っている。「神の武具を身につけなさい。……立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、平和の福音の備えを足にはき」(エペソ 6 : 13 - 15) これらの言葉は今日の私たちにとって単なる象徴以上の意味を持っている。

「神の武具を身につけ」、自分の信じる理想を高く掲げる時に、疑いの影は消えるのである。

イエス・キリストを友としようではないか。毎週安息日に耳にする聖餐の祈りの中に、御子のみ名を受け、御子を常に忘れず、またその下したまえる戒めを守ることが永遠の父なる神に証明するゆえに、御子のみたまを下さるようということが述べられている。では、キリストのみ名を受けるとはどういうことだろうか。御子を常に忘れないとはどのような意味か。狂信的になることもなく、かと言ってこの世にあってこの世のものにとりつかれることもなく、日々の生活に主を取り入れている人が、私たちの中に何人いるだろうか。私たちは救い主との交わりによってもたらされる力にどう頼っているだろうか。私たちは、キリストとの交わりについて話すことをプロテスタント教徒に任せてはいないだろうか。

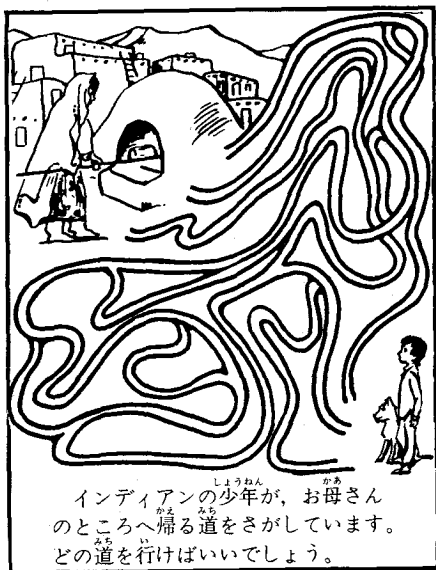
私は伝道中にひとつの経験をした。今でもはっきりと覚えている。集会の後、ひとりの男の人が私のところにやって来た。その人は年が私の倍ほどもある人で、何ともさみしそうな顔つきをしていた。彼は私に、自分は教会に入る前にとても大きな罪を犯

した、そして妻はいまだに赦してくれず、かと言って離婚することも認めず、折に触れてだめな人間だと言って自分を苦しめるのだと話してくれた。「私もだんだん妻の言うような人間なんだと思うようになってしまったんです。どうしたら、もう一度健全で清い心を持ち、汚れない思いを抱くことができるのでしょうか」と彼は言った。私が「このために何か努力してこられましたか」と尋ねると、彼は「とにかく自分が犯した罪と懸命に戦ってきました」と答えた。そこで私は彼に、罪と戦うこと以外に何かもっと良い解決法があるはずだと述べた。それから私たちは共にひざまずいて祈った。その後で彼に「人となりはその心に思うそのままである」という題の本を手渡した。私は彼の肩に手をまわし、きつと解決できると力づけた。その時、靈感か偶然かはわからないが、私は彼にこう言ったのである。「日曜学校で主の聖餐の準備をしてはどうですか。」(彼はアロン神権の教師の職であった)彼は答えた。「私にその資格があるでしょうか。」私はこう言った。「いいえ、私たちのだれもその資格はないと思います。でも、あなたが主のためにそれをしようと思うなら、主は喜ばれると思います。」それからというもの、彼は毎回聖餐のテーブルの前に座ることになった。6週間ほどしたある日、日曜学校が始まる前に廊下を歩いていると、向こうから彼がやってきた。私は励ましの意味で手を差し出した。ところが彼は手を後ろに組んだまま何も言わない。私が「何か気にさわったことでもあるのですか」と尋ねると、彼はこう答えた。「いやべつに。今せっけんできれいに手を洗ってきたところなんです。聖餐のテーブルにつくまではだれとも握手できません。」聖餐の

テーブルにつくということにすら、これほどの敬虔さを示すとは。私は感激した。それから6週間、集会の後に彼がやって来てこうささやいたのである。「私は生まれ変わりました。」

それから私は彼に、福音の原則の中で彼が心から信じているものについて、またなぜその原則を信じるかについて、集会で話をしてくれるように頼んだ。私は救い主の足跡をたどることによって彼が変わると考えていたのである。こうして彼は純然たる気持ちで主に仕え、週日には主に思いをはせることによって、新たに生まれ変わったのである。本当に素晴らしい経験であった。この時私は、彼が行なったように、救い主を生活の中心におくようなことがそれまでに一度もなかったことに気づいた。あえて申し上げるが、私はそれから後、彼の模範にならって行動した。するとどうだろう。自分の弱さだと思っていたことが、救い主に思いをはせ、主を祈りと生活の中心におくことによって克服できたのである。実に胸が踊るような経験であった。

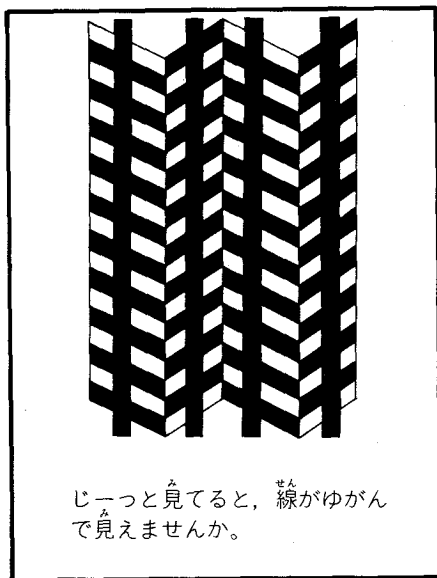
若い友人の皆さん、人生最大の悲劇とは何であろうか。それは、与えられている貴重なものを活用しないことだ。つまり、自分に与えられている霊と肉体、人生、熱意、みたま、信仰、愛、これらのものをフルに機能させないことである。私は皆さんが過ちや失敗や罪の重荷につぶされることのないように願っている。なぜならそれは、人を福音の理想といと高き神の御子から遠ざけ、福音に添った生活をするための源である勇氣と知恵を奪ってしまうからである。私たちが手にしている美しい福音、これを心ゆくまで享受するのに遅すぎることはないのである。



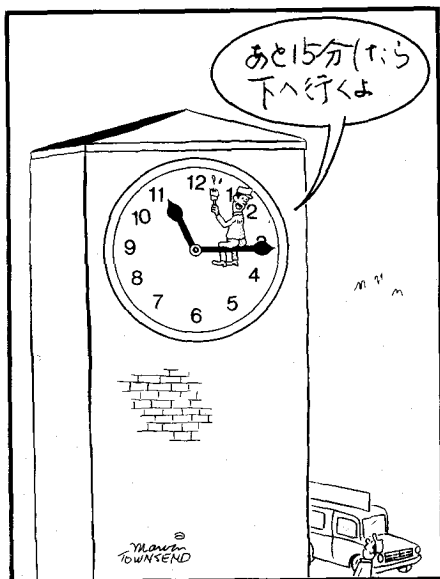
インディアンの少年が、お母さんのところへ帰る道をさがしています。どの道を行けばいいでしょう。



おもちゃばこ



じーつと見ると、せん線がゆがんで見えませんか。





ちい とも 小さなお友だちへ



「ママ、そんなのないよ！」
台所からベンの声が聞こえます。サラは思わず立ち止まりました。

「ベン、あなたの気持ちはわかるわ。」ママの声です。「でもね、サラが犬をこわがるのは、小さいときに、かみつかれたことがあるからよ。サラが悪いんじゃないわ。」

「それはわかるけど、どうしても犬をかいたいんだ。」

サラは、ふたりに気づかれないように、そっと階段をのぼって、自分のへやに入りました。そしてつぶやきました。

「わたしったらまるで赤ちゃんみたい。犬がこわくて近づくこともできないなんて。ベンはあんなに犬をほしがっているのに……。」

サラはその夜なかなか眠れませんでした。とつぜん、どこからか犬の遠ほえが聞こえてきました。思わずみぶるいがします。

「気のせいよ。このあたりにはジョンソンさんの家にしか犬はいないのに、ちがう方から聞こえてくるわ。」



まぼろしの犬

ローリー・W・ソントン

サラは 何も考えないで ねむろうとしました。そのとき、もう一度、犬の遠ほえが 聞こえたような 気がしました。サラは ベンのことを思い出して、ないてしまいました。「ぞめよ、どうしようもないわ。」……

次の日は いそがしい1日でした。サラは きのうのことを すっかり忘れていました。ところが 昼ごはんを食べるために 台所へ行こうとしたときです。あの遠ほえが、はつきりと聞こえたのです。

「ベン、ベン、今 犬の鳴き声が聞こえた？」

ベンは サラをにらみつけて 言いました。

「じょうだんは よしてよ。そんな話、聞きたくないよ。」

「うそじゃないわ、きのうの夜も聞こえたのよ。ほら、耳をすまして、聞こえるでしょ？」

ふたりは しばらくの間 耳をすましていました。

「何も聞こえないな。聞こえるのはおなかが鳴る音だけだ。さあ、食べに行こう。」

次の日は 日曜日です。サラは 家族といっしょに トラックに乗って 教会に行きました。家を出ると

きに あの鳴き声が また聞こえたような 気がしました。パパに話すと、ジョンソンさんの犬だよ、と言いました。

その日の夜おそく、また聞こえてきました。たしかに 犬の遠ほえがします。サラはねむっているベンを起こしました。

「どうしたの？」目をこすりながら ベンが言いました。

「ベン、聞こえるはずよ。犬の鳴き声よ。気のせいじゃないわ。たしかに 聞こえるの。ジョンソンさんの犬でもないわ。ほら、耳をすましてみて。」

あたりは しずまりかえっています。やがて どこからか 弱々しい犬の遠ほえが 聞こえてきました。

「ほんた 聞こえる。犬だ。それも 助けを求めている。すぐに さがしに行こう。」

「今すぐに？ 外は まつくらよ。とても 見つけられないわ。」

「そうか……それじゃ、あしたの朝 明るくなったら すぐに出かけよう。ふたりで べつべつにさがせば、すぐに見つかるさ。」

「でも、ベン……わたし、見つけても こまるわ。だって……」

「だいじょうぶ。見つけたら ほくに知らせればいい。そうときまつたら、さあ 早くねよう。」

夜が明けると、ふたりは犬をさがしに出かけました。1時間ぐらいたっても 見つかりません。ふたりは学校が終わってから、もう一度 さがすことにしました。

学校から帰ると、ふたりはフッキーを手に持って、家をとび出しました。

「サラ、ポンチョを持っていく方がいいよ。あらしに なりそうだから。」サラが家にもどって ポンチョを持ってくると、ベンは言いました。

「サラは南の方をさがしてね。ほくはあっちをさがすから。」

20分ほど さがしていると、あの犬の鳴き声が聞こえました。すぐ近くからです。

「どこにいるのー」
サラは呼んでみました。すると、それに答えるように 近くで犬がほえました。雨が ふってきました。サラは ポンチョをかぶると、声のする方へ 歩いて行きました。だんだん 犬の鳴き声が、近くなってきます。

用水路のところまで来て、サラは

びっくりしました。用水路のパイプの中に 犬がいるのです。パイプの入口が少しつぶれているので 出られないようです。ウサギを追いかけて中に入ったときに、運悪く、トラクターでも 通ったのでしょうか。

ベンを呼んでこよう。サラが 引きかえそうとすると、その犬は くんくん鼻をならしました。雨が はげしく 降りはじめました。サラは用水路を見て はっとしました。「このまま水がふえれば、犬は おぼれてしまう。ベンを呼んでくる時間はないわ。」

サラはどうしてよいか わからなくなりました。

「できないわ、とてもできないわ。」そのとき、心の中で、声がありました。「犬を助けなさい、助けなければおぼれてしまう。」

サラは おそろおそろ 用水路の中に おりて行きました。心の中でお祈りをしました。

「神さま どうぞ 助けてください。」
サラが近づいていくと、犬は喜びを 顔いっぱい表わしました。まるで 人間のようです。サラは ひざまずいて 犬の頭をなてながら つぶやきました。「かわいそうなワン



ちゃん。」

サラは犬の足をつかんで パイプから引き出そうとしました。水はどんどん 増えています。はやく助けなければ。サラはパイプの内がわに どろ水をぬって すべりやすくしました。はやく、はやく。サラは何度もひっぱって ようやく犬を助け出しました。

「もう、だいじょうぶよ、ワンちゃん。」どろだらけの犬を なでながら言いました。そして 自分のしていることに 気がつきました。

「サラ・ブラックハート、あなたは犬をだいているわ。少しも こわがらずに！」

サラは かわいそうな犬のために おそろしさを わすれていたのです。

犬はとても弱っていました。サラ

は その犬をポンチョでくるんで、だいて帰りました。犬はひとときもサラから 目をはなしませんでした。

その日の夜、だんろのまわりに 家族があつまりました。火のそばのじゅうたんの上では、あの犬が丸くなっています。パパが言いました。

「この犬は、サラからぜんぜん 目をはなさないね。」ママも言いました。

「そうね、こんなに 愛くるしい顔は 見たことがないわ。」するとベンが 目をかがやかせて言いました。

「それはサラのこと、それとも犬のこと？」

「この犬 かうことができたらいいわね。」サラがつぶやきました。

それを聞いて ベンがからかうように言いました。

「サラがそんなこと言うの 聞いたことない。これで、やっとほくは、犬をかえるんだね。」ベンは いたずらっぽく サラにウインクをしました。



ウィリアム・ハーレイ

うす暗がりの中で、エリザベスはあたりを見回しました。大きな船の中には、ただひとつ、石油ランプがチラチラと夜のやみを照らしています。回りの寝台でしんたいねている乗客の顔が、ぼんやりとやみの中に浮かんでいます。

エリザベスは、夜の音を聞くのが好きです。ゆれるたびにギイギイという船の音。赤んぼうを寝かすお母さんの子守歌。エリザベスには言葉はわかりませんが、赤んぼうはイギリス人も、ドイツ人も、スウェーデン人も、ノルウェー人も、デンマーク人も、みんなひとつの言葉で泣くことを発見しました。ねむる前は、スウェーデンの村に残してきた家や

友だちのことを思い出して、悲しくなることがあります。

昼間は、階段を上ってデッキに出ます。船の先頭に立って、アメリカはもう見えるかと目をこらして遠くを見渡しますが、くる日もくる日も見えるのは大西洋の海ばかりです。

エリザベスは、大きな帆が風をいっばいにはらんでいるのを見るのが好きでした。そして、水兵さんのように、自分もロープをつたってマストの上まで行きたいと思うのでした。船の上では、知らない子供たちが声をかけてくれます。また、エリザベスは英語を話そうとためしてることがありました。ユタに着いたら、スウェーデン語のかわりに英語を話

さなければなりません。

エリザベスは時々、水兵さんの部屋にしるびこんで行きました。そこで、コックさんと仲良しになりました。彼は、エリザベスにおいしいごちそうを作ってくれました。家の食事に比べて、それはどんなにおいしかったことでしょう。船の上では、週に5回しか料理することができないのです。その上、船のパンはかたくて、足でふみつぶさなければなりません。

1861年の5月から6月の5週間にわたって、「海の女王」というその船は、大西洋を横断したのでした。とうとう船がニューヨークの港に入り、末日聖徒の移住者はボートで岸まで運ばれました。そしてその夜は、キャッスルガーデンと呼ばれる大きな家で1夜を明かしました。

その晩のことです。子供たちがそろそろねむりにつこうとする頃、エリザベスの弟オーガストが黒砂糖の入ったふくろをいくつか見つけたのでした。ちょうどその中のひとつに穴があいていて、そこから中味がこぼれていました。船に乗っている間中、甘いものを食べたことのなかったふたりです。オーガストがさがし

てきたスプーンを手に、ふたりはさっそく砂糖パーティーを開いたのでした。しかし、翌朝はふたりともおなかをこわしてしまいました。

エリザベスは、家族やほかの聖徒たちと汽車にゆられてアイオワに行き、そこからほろ馬車隊に加わってユタに向かいました。その旅は、川を渡る時以外は歩き通しでした。

エリザベスのお父さんは、足を悪くしていました。スウェーデンで、お父さんはバイオリン演奏者とオーケストラの指揮者をしていましたが、とつぜんリューマチにかかってしまいました。それから少しずつ手足が使えるようになったのですが、簡単には回復しませんでした。ほろ馬車隊についていけないことを知ったお父さんは、後で必ず追いつくことを約束して家族に先に行くように言いました。

ひとり残されたお父さんは、必死で歩き続け、やっとひとつの明かりを見つけました。それは、南北戦争へ向かう兵士たちのキャンプの火でした。その中にひとりのスウェーデン人がいました。エリザベスのお父さんが音楽家だということがわかったと、兵士たちはどこからかバイオリ

ンを持ってきて、お父さんにひくように言いました。そして、翌朝、兵士たちはお父さんを馬に乗せて、ほろ馬車隊まで連れて行ってくれたのでした。

ユタに着くと、エリザベスの一家はマウント・プレザントという所に落ち着きました。エリザベスは、開拓者^{たくしや}となって一生けん命働きました。毛糸をすいてつむいだり、じゅうた^{かい}んを織ったり、乳しぼりをしたり、編物をしたり、しかの皮で手ぶくろを作ったり、麦わらぼうしを作ったり、干し草を積んだり、麦をたばねたり、本当にいろいろなことを覚えたのです。

エリザベスが8歳になった時です。近くの小川で人々が長老からバプテスマを受けているのを見ました。走って家に帰ると、エリザベスはそのことをお父さんやお母さんに話しました。そして、許しをもらって自分もバプテスマを受けたのでした。バプテスマの後^{せいじん}は、聖任を受けるために歩いて教会堂まで行きました。ところが、聖任を受けてしまうと、エリザベスはつかれて教会のいすの上でねむってしまったのです。そこはあまり人目につかない所だったので、

だれも気がつきませんでした。さて、集会が終わって人々は家に帰って行きました。けれど、エリザベスだけがもどきません。家族は心配してお姉さんのヘレンに見てくるように言いました。お姉さんが見つけた時は、エリザベスはまだ教会の中でねむっていました。

エリザベスが10歳になった頃のことです。7月のある暑い日、教会へ行くと、みんなは日照りのために作物が実らないので元気をなくしていました。その集会にブリガム・ヤング^{だいかんちやう}大管長が来ていて、お話をしました。大管長は大きな声で、身をのり出すようにして話しました。そして、人々が主の戒めに従うならば、主は天の窓を開いて雨を送って下さると約束したのです。エリザベスは、一生けん命に耳を傾けました。

予言者の言葉が終わるか終わらないうちに、エリザベスは空がくもり始めたのに気づきました。まもなく、雲は空いっぱい^{せいじん}に広がり、どしゃぶりの雨が降り始めたのです。その日、エリザベスは福音について大きな証を得ました。以来、その証は消えることがありませんでした。

新しい管理監督会日本・韓国地域監督に 北村正隆兄弟が就任

管理監督会日本・韓国地域監督の任にあったアーサー・K・西本兄弟が6月12日付をもって退任、その後任として現在同管理本部で地域監督補佐の任にある北村正隆兄弟の就任が発表された。西本兄弟は1973年に日本西部伝道部長として来日以来、8年間にわたって日本における教会の発展に貢献してきた。帰国後はジョーダンリバー神殿の近くの新居に落ち着かれる。

北村兄弟は佐賀県鳥栖市に生まれ、高崎経済大学を卒業後渡米、ユタ大学で経営管理学の修士課程に学んだ。その後マーチャンダイズ・インターナショナル社（貿易業）を設立するなどして現在に至っている。バプテスマは1961年6月25日。以後支部長、地方部長、副伝道部長などの要職を歴任、現在日本高崎ステーク部長として活躍している。趣味は登山、テニス、読書と多彩。奥様のシゲル姉妹とは1966年11月5日に結婚、今年が結婚15周年にあたる。



西本兄弟(上)と
北村兄弟

熱戦を繰り広げた卓球大会

——日本名古屋、名古屋西ステーク部——

日本における伝道80周年を記念する全日本モルモン卓球選手権大会が5月4日、5日の両日、愛知県厚生年金会館にて催された。地元名古屋をはじめ、東京、大阪、沖縄などから120名ほどの選手が参加し、白球を追っての熱戦が繰り広げられた。

4日には名古屋第1ワード部でレセプション（前夜祭）が催され、参加者は試合を前にしてお互いにリラックスした気分で親睦を深め合った。

試合は、男子シングルス、女子シング

ス、混合ダブルスの3種目に分かれ、それぞれトーナメント方式で進められた。

なお、それぞれの優勝者は次の通りである。

〈男子シングルス〉

日坂 潔（名古屋ステーク部）

〈女子シングルス〉

迫 律子（福岡ステーク部）

〈混合ダブルス〉

笠村 隆（福岡伝道部）

井手博美（福岡ステーク部）

学生祭，伝道の目的を達成

地元の大学生によって組織されている「LDS学生協会」主催の学生祭が去る5月9日、東京ステーキ部センターで開催された。

「LDS学生協会」とは、教会員の大学生が互いに友情の輪を広げながら、伝道の業をおし進め、福音への証を強め合うことを目的にした活動グループ

中村良昭兄弟▶

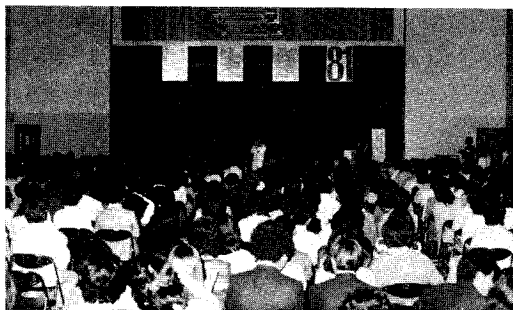


◀ 湯沼誠二兄弟

である。

今回の学生祭はその目的を達成する初めての企画であった。会場には主催者側の予想を上回る700名以上の人々が集い、終始フレッシュさに満ちあふれた祭典となった。

プログラムは『高村光太郎におけるアメリカ』と題する国文学助教授、湯沼誠二兄弟の講演に始まり、医学博士（心臓外科医）中村良昭兄弟による『国際障害者年に寄せて、心臓外科医の経験から』の講演が続いた。高村光太郎の生活の一端を紹介した湯沼兄弟の話には、作家高村光太郎の人となり垣間みることができ、共鳴できるものがあった。また、中村兄弟の話には、生命の尊厳さを教えられた。普段、私たちが見



ることのできない心臓手術時の様子を写真で紹介するなど、その話はさわめてユニークな内容であった。

他に日本のレコード界にデビューしたJ・コールマン兄弟の新曲発表や、「LDS学生協会」のメンバーによるスキット、ピアニスト石井由美姉妹のコンサートなど、盛り沢山の催し物が続いた。そのプログラム一つ一つに会場の雰囲気は和らぎ、集った人人は大いに楽しむことができた。

最後に、伝道の重要性を説いた菊地良彦長老の次のような内容のメッセージが田中健治長老により代読された。「隣の中国では、今や人々は自由に礼拝をすることが可能となっています。やがて中国への伝道にも目を向けなければならない時期が来るでしょう。そのためには次代を担う若い人々の力が待ち望まれます。」

今回の学生祭は当初の目的を十分に果たすことのできた有意義な企画であった。今後も若い人々の結集した力が伝道を目的としたプログラムに生かせるよう私たちは期待したい。

——『父親の存在』を考える——

家庭の崩壊や家族の不和がもて引き起こされる事件ほど悲しいものはありません。私たちはそういうニュースを見聞きするたびに心が痛み「家庭とは何か」と考えさせられます。

事件の起きる家庭を掘り下げてみる時、いつもきまって指摘されるのが“父親不在”、“父親の権威失墜”という問題です。最近、急増の傾向にある低年齢の子供の非行、自殺、家庭内暴力等はそういうことに因をなしている場合が非常に多いと言われていています。父親の存在が家庭にあつていかに大きく、またその責任がいかに重いものかは計り知れません。そして今ほど、家庭における父親のあり方が問われている時はないように思われます。

そのような折に『父業入門』と題し、理想ともいうべき父親像を本にまとめた教会員がいます。東京第6ワード部の監督を務める松浦孝康兄弟がその人で、彼は22年に及ぶ教会員生活の体験を生かして、父親の存在の重要性を世の人々に訴えかけています。主張の中心は当教会が提唱する「家庭の夕べ」の教えを実践することで、私たちにとても親しみやすい内容となっています。

以下に松浦兄弟の証を紹介しましょう。



出版物と
著者の松浦兄弟

私がバプテスマを受け、末日聖徒イエスキリスト教会の会員となってからもう22年にもなります。バプテスマを受けたことがつい昨日のように思えてなりません。この間多くの兄弟姉妹の方々の助けと励ましによって信仰生活を送れたことにまず感謝を申し上げたいと思います。

この私が昨年6月に『父業入門』という本を出版しました。この本は私が末日聖徒として家庭を持ち、経験した「家庭の夕べ」に対する証としての出版であると言えます。さらにまた、私の父親に対する強い憧れを書いたものでもあります。と言いますのは、私の青少年期に放浪者として生活した大管長が述べられた「家庭はこの世の小さな天国である」という言葉とはおよそ縁遠

い家庭生活を送っていたことに由来します。

私は、生まれて47日目に父を失い、祖母、母、兄弟5人の末っ子として育てられました。昭和21年、私が6歳の時に祖母を失い、10歳の時には、兄と母とを亡くしました。それ以来私は、家庭の中から父と母とを欠いた家庭生活を送ることになりました。学校の授業参観、運動会、学芸会の時など「私には父がいないのだから、母がいたらなあ」といつも感じさせられました。

このような環境の下で育った私の心には、いつのまにか「私は何のために勉強するのか」とか「人は何のために生きているのか」という疑問が木々と頭をもたげてきました。しかしその一方では、明るい家庭への願望と父親に対する強い期待が育ってい

ったようです。

私は、高校を卒業すると同時に上京し、アルバイトをしながら予備校に通いました。そして上京して間もなく1年が経とうとしていた1月に、末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師であったデビッド・ガンダースン長老に、新宿駅のプラットホームで会ったのです。この出会いを契機に私の心に信仰の光をともし下さったのは、ジミー・フォックス長老であり、ヘンリー・高橋長老でした。またその信仰を育てて下さったのは、ジョン・リード・アダムス長老でした。このようにして教会に通い出した私は、教会では、「家族の昇栄」とか「永遠の結婚」、「承図」などに強く心をひかれました。教会の責任も、書記、日曜学校教師、副支部長、地方部評議員、日曜学校会長、副監督などを経験した後、6年前に東京第6ワード部の監督に召されました。監督に召された私は、教会を世の人々に知っていただくには何がよいかと考えて行くうちに、「家庭の夕べ」のプログラムを人々にアピールしようと著作を思いつきました。自分自身の経験はもちろんのこと、今日の家庭の多くが離婚によって破壊され、親の愛情を知らずに育て行く子どもたちの心を思いやる時、私の決心は強まって行くばかりでした。

それからというもの、新聞の社会面や家庭欄の切り抜きから始まって、雑誌などを読みながら少しずつ家庭問題に関する資料を貯えました。離婚が3分49秒に一組生じていることや家庭内暴力の発生などを知るにつれて著作への欲求は、高まるばかりでした。

家庭や仕事、教会などの責任のあい間に、ある時は朝早く、ある時は家族が夜寝静

ってからコツコツと書き始めました。書くことは嫌いではありませんでしたが、文筆活動が初めての私にとって思うように筆が進まず苦労したものでした。こんな時、私の頭にひらめいたのは、イラスト入りの本を書くことでした。幸い改宗して間もないホームティーチングの同僚の内田四出男兄弟がイラストレーターを快諾して下さいました。早速彼と共にビジネスホテルに泊り、著作の動機と構想を語り合いました。このようにしてでき上がったのが、「父業入門—父親復権の時代」です。この本は現在、東京第6ワード部の神田治兄弟の会社である(株)春秋社から発売していただいています。一方、私はこの本を全国の青少年協議会に寄附したり、国会議員の方々にも郵送しています。宇都宮徳馬先生や河野洋平先生などからはお礼状をいただきました。また、青少年協議会の長をしておられる県知事の方や事務局の方々からも同様の礼状を頂戴しています。

それに去年は、日本経済新聞、世界日報その他の新聞で書評にとり上げられました。吉岡たすく先生からも激励状が届いています。今年もニッポン放送の「八代英太のお早ようニッポン」でも取り上げられました。このように徐々にではありますが、人々の目に留まることとなりました。私の著作が少しでも人々のお役に立つならば、これにまさる喜びはありません。今日の私を築いてくれたのは、このイエス・キリストの福音です。いつも天父のみ守りを得て信仰生活を送れることに感謝しています。私は誠に末日聖徒イエス・キリスト教会が真実の教会であることを証しする。イエス・キリストのみ名により、アーメン。

末日聖徒イエス・キリスト教会

浦和ワード部

付属図書館

すると、激しい突風が起り、波が舟の中に打ち込んできて、舟に満ちそうになった。ところがイエス自身は、舳の方でまくらをして、眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスをおこして、「先生、わたしどもがおほれ死んでも、おかまいにならないのですか」と言った。イエスは起きあがって風をしかり、海におかつて、「静まれ、黙れ」と言われると、風はやんで、大なぎになった。イエスは彼らに言われた、「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」。彼らは恐れあなのいて、互に言った、「いったい、この方はだれだろう。風も海も従わせるとは」。